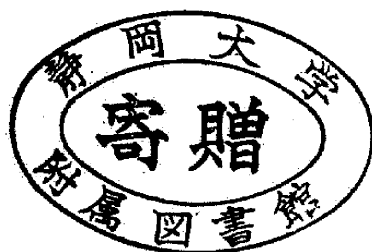


中国語のディスコースに関する基礎的研究

(研究課題番号 09610457)

平成9年度～平成11年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2))
研究成果報告書



平成12年3月

静岡大学附属図書館



030850414 1

研究代表者 今井敬子

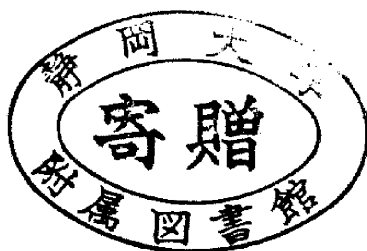
(静岡大学人文学部教授)

中国語のディスコースに関する基礎的研究

(研究課題番号 09610457)

平成9年度～平成11年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2))

研究成果報告書



平成12年3月

研究代表者 今井敬子

(静岡大学人文学部教授)

言語研究の対象として、ディスコース (discourse “談話”) が盛んに唱えられるようになったのは、1970 年代以降である。ディスコースという概念は、表現内容の上でまとまりをもった文の集合体、文を超えた言語単位であって、それは特定のコンテキストの中で特定のコミュニケーション機能を持って使用されると理解される。

今世紀の言語学の最大潮流である生成理論は確かに大きな足跡を残したが、その一方で、その統語論は文レベルを研究対象として、コンテキストを視野の外に置いた孤立した文を扱い、また、実際の使用とはかけ離れた抽象物として言語のシステムを捉えるなどの傾向をもたらした。一方、ディスコース研究という比較的新しい分野は、思考・主観をもつ生身の人間による、様々なレベルのコンテキストの中での、実際の具体的な言語使用に注目した研究姿勢であり、その意味では生成理論の対極にあるといっても言い過ぎではないであろう。

ディスコースという観点に立つと、言語の表現主体、その内面性、その背景にある社会や文化等々が、問題意識の中に入ってこないわけには行かない。そうした事柄を見据えながら言語を捉えようとするのがディスコース研究の姿勢である。

ディスコース研究は言語学の隣接諸科学とも関連を持ちながら、その応用領域を広げつつ発展してきているが、本研究は、中国語におけるディスコース論の構築を将来的に目指しながら、そのための基礎的な作業と理論的な検討を進めるべく着手したものである。

中国語学においても、研究対象は従来、一文 (句子) とその構成要素をもつばらの中心としてきたが、一方で、本来、形態的特徴に乏しいとされる中国語の特殊事情として、なにをもって文とするかという文の認定に関わる問題も存在した。

中国語におけるディスコース研究は、80 年代の半ばごろから行われるようになったが、それに先駆ける研究として、中国語などの topic-comment 主題—解説型言語と、英語などの subject-predicate 主語—述語型言語とを対比的に取り上げた新たな言語類型論が提唱された。ふたつの類型の大きな差異は、厳密な格関係によって結ばれる主語と述語の関係に対して、主題と解説の関係は格関係による拘束から自由であり、いったん設定された主題は、その後は往々にして言語化されず (主題の省略)、その主題に関するさまざまな解説が理論的には際限なく続く (topic-chain 主題連鎖) ことができる点にある (C. N. Li & S. A. Thompson、曹逢甫、石定栩、陈平などの論考)。時期的に前後して、文化言語学を提唱する立場からも、ややニュアンスは異なるが、中国語の特徴を主題と解説にあるとする論が展開された (申小龙などの論考)。こちらもまた、形態的特徴ではなく表現内容によって、ひとまとまりの単位が形成されることを指摘している。

また、“逗号”（カンマ）で結ばれた複数の小句が連続し、最後に“句号”（マル）が置かれ、そこまでの全体がひとまりの表現内容をもつという構造体が、中国語に広範に見られ、どこで切ってもよく、どこまで続けてもよいことから水の流れたとえて“流水句”と呼ばれるが、これもまた形態的な区分でなく、表現内容によるまとまりを特徴とする（呂叔湘、胡明楊、大河内康憲などの論考）。

このように、文という単位に立つては十分な説明ができないようなしくみや言語事象が往々にして見られることから、中国語は、ディスコース研究の対象として多くの材料を提供しうる言語であると考えられる。

こうした状況の中で、本研究の研究代表者は、「主語承前省略の条件について」（『中国語』397号、内山書店、1993年）、「「ゼロ照応」の日中対照—主題化との関連で—」（『信州大学教養部紀要』27号、1992年）などの論考による主語・主題の省略現象について考察し、また、「『紅樓夢』の語りの構造—空間、時間標識の機能—」（『中国語学』242号、日本中国語学会、1995年）、「『紅樓夢』の地の文に見られる時間ダイクシス」（『中国語研究』37号、中国近世語学会、1995年）では、ディスコース・レベルでの話し手（語り手）の主観を空間・時間を表すダイクシス語の用法に着目して調査した。また、それに先立つ「『紅樓夢』の“来”と“去”—物語の文章における視点表現—」（『信州大学教養部紀要』25号、1991年）においては、ダイクシス語である移動動詞の用法を通して、語り手の主観のありかを調べた。これらはいずれもディスコースという視野に立つことによって初めて観察可能なテーマであった。本研究は、上述の試行的な研究によって得た問題意識の上にあるもので、上述の研究の延長上に着手したものである。

科学研究費補助金の交付期間中に実施した研究では、従来は文内部の問題として取り扱われてきた項目を、ディスコースのレベルで観察することによって、新たな特性を発見できた。具体的には三つに類別される。まず、ディスコースの結束性の調査の一環として、前後の節（句）を論理的に結び付ける連詞について、実際のデータを通して使われかたを調べるという実証的な研究をした。従来、中国語では連詞は必ずしも常に必要ではなく、特に話しことばでは使用されない傾向が大きいと言われてきた。しかし、実際の自然な発話の連続においては、少数の特定の連詞（特に、因果、逆接などを表すもの）が予想外に多用されていることがわかった。本研究では、因果を表す連詞“因為”と“所以”の使用状況を調べ、因果表現の諸類型が選択使用されるときに要因が、ディスコースの展開と密接に関連している（ある類型はディスコースの流れの中で予測に反する展開をみるとき、ある類型は話し手の評価、意見などが織り込まれるときに選択される、など）ことを指摘した。また、ディスコースの中での因果関係は、単純ではなく、二重、三重の因果関係が層をなしてその全体に連詞が巧みに配置されていることや、因果関係を表すという本来のはたらき

を超えて、判断・主張などの根拠を導いたり、話を単に繋いだり、終結させたりなどのように、ディスコースの構成と展開にかかわる標識としてはたらいしていることがわかった。

第2に、文法と音声の関係をディスコース・レベルで観察するための手始めとして、中国語の音声的特徴である声調言語という性質について、中国語の方言である蘇州語と、同じく声調言語であるタイ語とを取り上げ、一単位内でのピッチ変動を測定し、それぞれの言語に固有の個別性（言語差）と個人に特有な個別性（個人差）をふまえて分析を行った。

第3に、ディスコースの中での人称指示について、シナリオのせりふの中の人称代名詞（特に二人称の二種の代名詞及び三人称代名詞）の使用特性を調査したが、その結果、指示する者と指示される者との身分的、社会的、心理的關係などが、人称代名詞の選択使用を決めていること、逆に言えば、人称指示のありかたの違いが、劇中人物相互の關係性を反映する言語標識の違いとなっていることを、個々の例に照らして明らかにした。

本研究は当初、主題の展開方式のありかた、ディスコースと「視点」の問題の究明も目標としていたが、交付期間中には十分なデータの分析ができず、本報告書に記載することができずに終わった。したがって今後は、本研究のこれまでの成果の上に立って、これらのテーマについての研究を継続することを計画している。

以上のように、残された課題は今後に譲ることになるが、本報告書は、科学研究費補助金の交付期間中に発表した論考を基本部分にして、その他に一部筆を加えて構成したものである。

研究組織

研究代表者： 今井 敬子（静岡大学人文学部教授）
研究分担者： 岩田 礼（愛知県立大学外国語学部教授）

研究経費

平成 9年度	1、000千円
平成10年度	500千円
平成11年度	500千円
計	2、000千円

研究発表

学会誌等：

今井敬子「曹禺『雷雨』の人称代名詞一言語面からの人物関係の検証」、『人文論集』（静岡大学人文学部）第48号—1、1997年7月

岩田礼「声調言語に於けるピッチの“上げ”と“下げ”について—タイ語、蘇州語の筋電図—」、『音声研究』（日本音声学会）第1巻第3号、1997年12月

今井敬子「中国語の因果表現—談話における選択要因について—」、『人文論集』（静岡大学人文学部）第49号—1、1998年7月

今井敬子「談話における“所以”の用法と機能」、『人文論集』（静岡大学人文学部）第50号—1、1999年7月

目次

第1部 中国語の言語事象とディスコース研究

第1章 中国語の因果表現—談話における選択要因について—

はじめに	8
1. 資料および考察対象の範囲	8
2. 使用状況—『当代』と『北京人』の間の差異	9
3. 因果関係の及ぶ範囲	11
4. 二重因果句	14
5. 先果後因型を選択要因	18
まとめ	22

第2章 談話における“所以”の用法と機能

はじめに	25
1. “所以”の単用による標準的因果表現形式	25
2. 談話中での“所以”の特徴	26
2. 1. 作用範囲	26
2. 2. 因果関係の重層性	28
2. 3. 言語外の因果関係	29
3. 派生的機能	30
3. 1. 話題の終結	30
3. 2. 主張・判断・推論などの反復	32
3. 3. 発話をつなぐ	34
4. 発話行為レベルでの因果関係	36
4. 1. 新話題の冒頭	36
4. 2. 発話行為動詞を導く	37
まとめ	37

第2部 言語テキストと音声現象への応用的研究

第3章 曹禺「雷雨」の人称代名詞一言語面からの人物関係の検証—

はじめに	41
1. 主要人物とあらすじ	41
2. 人称代名詞の使用基準と使用範囲	42
3. 人物関係の個別検証	45
3. 1. 魯侍萍と 周朴園、 周萍	45
3. 2. 周繁漪と周萍	49
3. 3. 魯四凤と魯貴、 周萍、 周冲	54
おわりに	59

第4章 声調言語に於けるピッチの“上げ”と“下げ”について

—タイ語、蘇州語の筋電図—

1. はじめに	62
2. 実験の概要	63
3. ピッチの下げ—SH活性化の諸形態	66
3. 1. 上昇調に於ける声立て	66
3. 2. 下降調	66
(1) 下降調の音響的特性	66
(2) SHの活動	67
4. ピッチの“上げ”—CTとVOCの活動	67
4. 1. 高下降調に於ける声立て	68
4. 2. 上昇調に於けるピッチの上げ	68
4. 3. 語末に於けるVOCの働き	68
5. まとめ	68

第1部 中国語の言語事象とディスコース研究

第1章 中国語の因果表現—談話における選択要因について—

第2章 談話における“所以”の用法と機能

中国語の因果表現

—談話における選択要因について—

今井 敬子

はじめに

中国語では、分句と分句、句子と句子¹⁾を結ぶ連詞は必ずしも常に必要なものではなく、特に話し言葉では使用されない傾向が大きいと一般に理解されている。ところが、実際の自然な発話の連続を調べてみると、特定の連詞が予想外に多用されていて、そうした少数の連詞のみが圧倒的に多く使われているという現象が見られる。本稿では、自然発生的なモノログ資料について調査をしたが、その範囲で見える限り、逆接関係を表す連詞の“虽然”と“但是”、因果関係を表す“因为”と“所以”の使用が、特に目立って多かった。こうしたことから本稿では、連詞の使用を談話の中で見直すという目的のために、今回は因果関係を表す連詞を対象として取り上げ、実際の自然な発話連続の中での使用実態を調べることにする。

本稿ではまず、二種類のモノログ資料——自然な発話の録音内容をそのまま文字転写したものと、文字化の過程で推敲、編集したもの——を調べ、両者における因果関係を表す連詞の使用状況の異同を調べる。次に、因果の提示順序の違いによって表現類型を整理し、それぞれのタイプが談話の中で選択使用される要因について考察する。

資料および考察対象の範囲

調査のための資料として、『当代北京口語語料』（北京語言学院語言教学研究 所、1993年。以下、『当代』と略称する）および『北京人——一百个普通人的 自述』（张辛欣・桑晔、上海文艺出版社、1986年。以下、『北京人』と略称する） のふたつを用いる。いずれも、80年代半ばに、住居、職業、家庭、娯楽、経歴 などの個人的、日常的な事項を話題にしてのインタビューを実施し、解答者の 口述内容の録音を文字化したものである。解答者は『当代』が102名、『北京』

が100名でほぼ同人数であり、文字数は前者が40万字、後者もほぼ40万字で、ほぼ同等の分量である。どちらの資料のインタビューも、質問者の発話は収録されていないため、発話のみかけ上の形態は、解答者のモノログになっているが、実際には、聞き手を二人称で指示していたり、聞き手に向かって質問を発していたりすることからも明らかなように、話し手は常に聞き手の存在を考慮し、聞き手の理解度確かめながら発話を進行させていることが見てとれる。

『当代』は、実際の自然な発話による音声言語をそのままのかたちで文字転写したもので、一方の『北京人』は、録音した音声言語を推敲、編集した結果、『口述ドキュメンタリー文学』というジャンルの作品に練り上げたものである。したがって、前者は自然に生じる発話の構造特性を備えているが、後者は、編集者の文体意識による推敲の結果、整えられ、書き言葉に近い特性を帯びているであろうし、一方で、いわば人為的な「口述らしさ」も備えているのではないかと推察できる。

ふたつの資料の中で使われている因果関係を表す連詞としては、“因为”と“所以”が最も使用頻度が高い。その表現形式には、“因为”と“所以”を呼応させたものといずれか一方を単用したものがある。また、因果関係の提示順序からすると、原因・理由が先行して結果・帰結が後に続く場合（以下、先因後果型と称する）と、その逆の、結果・帰結が先行し、原因・理由が後続する場合（以下、先果後因型と称する）がある。本稿では、形式および因果関係の提示順序の二点から、因果表現の両資料における使用実態を調べてみた。

使用状況——『当代』と『北京人』の間の差異

本稿の調査で多数見られた形式は以下のように分類できる。ただし、“因为”、“所以”ともに、分句の頭、句子の頭のいずれにも置かれうるため、前件と後件はカンマ（逗号）で区切られている場合とマル（句号）で区切られている場合がある。标点符号に関わる問題は後述するが、ここではひとまず、逗号で統一して示しておく。

- ① 因为・・・、(所以)・・・。
- ② ……、因为・・・。
- ③ ……、因为・・・、(所以)・・・。
- ④ ……、所以・・・。

①は、“因为”と“所以”の呼応形式の他にも、“因为”と副詞“就”、“便”、“才”などとの呼応形式、および“因为”の単用の場合を含める。先因後果型である。

②は、“因为”の単独使用であって、先果後因型である。“因为”ではなく“原来”が使われているものもこれに含めた。²⁾

③は、“因为”は必ず現れるが、“所以”はないこともある。“就”、“便”、“才”などの副詞が使われることもある。この型の特徴は、原因句（以下、“因为”によって原因・理由を表す句を原因句、“所以”などによって結果・帰結を表す句を結果句、また、両者をあわせた全体を因果句と称する）、あるいは因果句全体が、その先行句と先果後因型の因果関係を持ち、同時に、その後続句と先因後果型の因果関係をもつという、二重の因果関係が見られるところにある。①と②を兼ね備えたはたらきをしている。

④は、“所以”の単独使用形式である。原因・理由の標識が明示されていない場合の先因後果型であるのが基本であるが、実際にはそれだけでなく、はっきりした因果関係は見られずに、前件の内容を後件に引き継いでいるだけのよう理解できる例もはなはだ多い。実際の談話で単用される“所以”は、必ずしも因果関係を表しているだけではなく、より広い意味を担って使われている³⁾ものとうかがえるため、因果表現の考察を目的とする本稿では、“所以”の単用形式は考察の対象からはずすこととする。

“因为”についても、「当代」は実際の発話のままを文字転写しているので、論理的に整合していない例が少なくない。たとえば、形式は整っていても意味的には因果関係が不明なもの、“因为”を不適切に使ったあとで他の語で言い直している場合などは対象外とし、また、“因为”の単純な反復は加算せず、明らかな因果関係を表していると読み取れる例だけを対象に、上で述べた①から③までの各形式の出現件数を示すと、次のようになる。①から③の形式番号のあとに、因果の提示順序による型の名を示した。括弧内は内数である。なお、①の括弧内の「呼応形式」とは、“因为”と“所以”の呼応を指し、「“因为”の単用」には後件に副詞が現われる場合も含んでいる：

	【当代】	【北京人】
①先因後果	278	52
(呼応形式 74 “因为”の単用 204)		(呼応形式 3 “因为”の単用 49)
②先果後因	261	46

『当代』は40万字であり、『北京人』もほぼ40万字であることは冒頭に述べたが、上に示した因果形式全体の出現件数の差から、実際の自然な発話である『当代』におけるほうが、編集され整えられた『北京人』の場合よりも使用頻度ははるかに高いことがわかる。一般に、中国語は連詞の使用がすくないと言われるが、実際の自然な発話連続の場合は必ずしもそうではないようである。なぜ、自然な発話のほうが連詞がはるかに多く見られるのであろうか。時間を追って線状的に形成されていく音声言語の連続体は、前後の意味関係を即時にわからせる標識がなければ、聞き手は理解しにくいであろう。文脈や言語外要素の助けによって理解がはかられる一方で、言語化された標識が使われていることも見逃してはいけない。一方の『北京人』は、実際の発話を「読み物」に練り上げるべく推敲・編集されたものである。文章の上を行きつ戻りつしながら読み進むことのできる『北京人』は、線状性、即時性の拘束がはるかにゆるい。こうした理由から、『当代』のほうが因果関係を表す連詞が多用されている、ということではないだろうか。

個々の型について比べると、①の形式の中では、“因为”と“所以”の呼応形式が頻度がきわめて低く単用形式の頻度が高いという一般に認められている現象⁴⁾が、両資料で共通してみられる。

因果関係の提示順序では、①の先因後果型と②の先果後因型の数を比べてみると、『当代』でも『北京人』でも、①と②の間に大差はない。すなわち、一般に、先因後果が自然な順序であると言われるにもかかわらず、使用件数が抜きんでて多いわけではなく、後から原因・理由を補足して説明されると言われる先果後因型も大差なく使われているわけである。

『当代』と『北京人』で使用比率が大きく違うのが、③の二重因果型である。この型は、『当代』には少なからず出現するが、『北京人』にはごくわずかであることから、自然な談話に現れやすい型ではないかと推測することができる。

因果関係の及ぶ範囲

先に述べたように、①、②の型と③の型との違いは、因果関係が因果句内部でとどまっている(①、②)ことと、因果句を超えて前後の句に及んだ結果、二重の因果関係を形成している(③)ことの違いにある。ここでは、両タイプを

具体例に即して比較してみる。

次の例1)の中の、「何度も行っているので印象に残っている」という内容を表している因果句は①型であるが、先行句と後続句の間にはさまれて、注釈にあたる意味内容を表し、挿入句となっている。因果関係の及ぶ範囲は挿入句の範囲内にとどまっている。

1) 这我觉得这个地方儿呢, 我因为去得多, 我就对它有个印象, 距武汉这个地方儿是二百三十二公里, 坐公共汽车呢, ……『当代』5頁

この地域は、何度も行っているので、印象に残っているんですが、武漢からこの地域までは232キロで、バスに乗っていくと……

例2)も①型である。“因为”に呼応する標識はないが、「高校には行ってからは……」以降が結果句である。

2) 学生呢, 课外活动倒是比较丰富的。嗯, 因为我的爱好比较多。嗯, 上了高中, 上了高中以后呢, 我是参加了计算机组, 还有无线电小组。嗯, 另外呢, 在课, 在学校以外呢, ……『当代』23頁

生徒はですね、課外活動はわりと豊富です。ん、私は趣味が多いですから。ん、高校に入って、高校に入ってから、コンピュータ・クラブに入りました、それにラジオ・クラブにも、ん、その他に、授業、学校以外には、……

2)では、「生徒は課外活動が豊富」であることを表している先行句と、因果句とは直接的な因果関係をもたない。これは、両者を結ぶと「生徒は課外活動が……豊富だ。私は趣味が多いから。」が意味をなさないことから明らかである。すなわち、ここでの因果関係は因果句内部だけに見られる。

例3)は②型である。

3) 不过, 我已有大半年停笔不写了, 熟悉我的人开始都觉得惊讶, 因为我是在良好状态下停下来的。我觉得文学照现在这样是夕阳工业, 没劲。『北京人』152頁

でも、私はもうゆうに半年も筆を絶って書いていません、私をよく知っている人は最初はすっかり驚いていました、というのは順調だったのに書くのをやめたのですから。文学は今や斜陽産業だと私は思うし、やりがいがないですよ。

ここでの因果句は先果後因型であるが、因果関係は因果句内部で完結し、後続する「文学は斜陽産業……」と因果句との間に因果関係を形成しているわけではない。

上のような例に対して、③型の4)では因果句内部だけでなく、その先行句との間にも、因果関係に相当する関係が見られる。

4) 爸爸呢, 从各方面呢, 反正也是挺, 挺照顾我的哈。因为打小儿就娇生惯养, 所以什么活儿也不会干。就是从母亲去世以后, 嗯, 才慢慢儿锻炼吧。锻炼。从各方面, 家务各方面呢, ……『当代』17頁

お父さんは、いろんな面で、とっても、とってもよく私の面倒を見てくれます。小さいときから甘やかされて育ったので、なにもできないものですから。母が亡くなってから、ん、やっとなんか少しづつ訓練をしたんですよ。訓練を。いろんな面から、家事のいろんな面、……

4) の因果句では、その先行句「父はとてもよく私の面倒を見てくれる」のはなぜなのか、とそのわけを説明している。すなわち、先行句の内容の理由説明を因果句でなしているのである。したがって、この例の因果句は、因果句内部で表している因果関係の他に、因果句全体の先行句に対しても、ある種の因果関係をもっている、と理解できる。このように、因果句全体が先行句と因果関係に相当する意味関係をもつ場合、日本語では、文末を言い切りのかたちにならずに、たとえば訳文のように「何もできないものですから」の理由を表す「から」、あるいは、「なにもできないんです」のように説明の「ん(の)です」が、文末に必要になり、それによって、別の句との関わりが生じていることが暗示される。しかし、中国語の場合は、そのような何らかの形態上の差異が現われることはない。

本調査の収集データでは、因果関係の範囲が因果句の内部にとどまるもの(①、②の型)が多数を占めた。これは、本来、因果句とは意味的完結性の高い、自足した構造であるということを示しているのではないかと考えられる。①、②の型に対して、因果句がその先行句あるいは後続句との間にも因果関係を生んでいるもの(③の型)は、そのほとんどが『当代』で見られ、『北京人』には少数しかなかった。これは、このタイプには前後文脈に依存するという談話的要因が働いていることをうかがわせる。『北京人』で少数しか使用されていないことは、必ずしも、文字化以前のもともとの音声言語による発話でも少ししか使われていないことを示してはいないであろう。むしろ、編集者の文体意識によって推敲された結果、書き言葉に近い特性が現われたということであろう。

このような二重因果型の因果句には、先因後果型がもとになってできていると理解できるものと、先果後因型がもとになっていると思われるものがある。次に、二重因果型の形式と意味について見ていく。

二重因果句

先因後果型と先果後因型を形態的に弁別できるとしたら、手がかりになるのは句読点の配し方であろう。句読点の配し方は、もとよりそれを付す者の任意に負うところが多いため、必ずしも客観的、普遍的なものではないが、ここでは、本稿の調査で収集した二重因果句の例を、句読点の配し方によって以下のように分類、図式化してみた。

- ア A。因为B，（所以）C。
- イ A，因为B，（所以）C。
- ウ A，因为B。（所以）C。
- エ A。因为B。（所以）C。

逗号で区切られた分句間の関係のほうが、句号で区切られた句子間の関係より緊密であるという理解に立つと、それぞれのタイプの構造は次のように理解できる：

アは、BとCが先因後果型を作り、その先行句としてAがある。

ウは、AとBが先果後因型をつくり、その後続句としてCがある。

イは、A、B、Cいずれも分句であるため、また、エはABCがいずれも独立句であることから、どちらのタイプも、先因後果か、先果後因かは、かたちの上では不明である。

前後句との因果関係が見られる場合は、AとCの内容が異なる場合（或いは、厳密には同一でない場合）と、同一である場合のふたつがある。まず、前者について、具体例を見ていく。

例5)はア型の例である。“因为”と“就”が呼応して因果句を形成している。
5) 嗯，现在虽然自己开始过日子哈，有时候儿跟我母亲一块儿。因为我现在母亲身体不好，有时候儿我就到她那儿去。我等于现在有三个地方，婆婆家，我自己娘家，还有我自己还有一个家。【当代】283頁

ん、今はもう自分で生活を始めてますけど、時々母といっしょです。母がこのところ体の具合が思わしくないの、時々母のところへ行くんです。今は、家が三か所あるのと同じです、姑の家、実家、それに自分で家をもってます。

因果句BCの中の原因句Bの内容「母の体の具合がよくない」ことは、先行句Aの内容を受けて、「時どき母といっしょにいる」ことの理由を表している。つまり、原因句Bは、結果句Cと因果関係（先因後果）をもつと同時に、先行

句Aとも因果関係（先果後因）をもっている。結果を表すふたつの句—AとCは、たがいに関連のある内容ではあるが、まったく同一内容というわけではない。

例6) もア型である、“为什么呢？”で導かれて因果句が続いている。

6) 解放前呢，就是说，我并不，不太热爱我这工作，为什么呢？因为那会儿护士被人看不起的，所以，甚至于呢，我出去都不愿说我是护士。『当代』285頁

解放前は、つまり、決して、この仕事が好きじゃありませんでした。なぜかというところ、そのころは、看護婦はばかにされてましたから、それで極端な場合には、外では自分が看護婦だなんて言いたくなかったほどです。

因果句の中の原因句の内容「当時は看護婦がばかにされていた」ことは、先行句の内容「看護婦の仕事は決して好きじゃなかった」ことの理由説明になっている。結果を表すふたつの句AとCの内容は一致していない。

例7) はイの型である。“因为・・就・・”が因果句の部分である。

7) 我有一个大儿子呢，这个叫朱建国，他原来从这个初中毕业以后呢，就安排到这个青海去工作了，因为青海那儿建设一个拖拉机制造厂，这样儿他就到那厂子去了。『当代』67頁

息子がひとりいまして、朱建国といいますが、その、中学を出てから、すぐに青海へ配属されていきました、青海にトラクター工場を建設したので、それでその工場へ行ったんです。

ここでは、因果句全体の内容が、先行句の内容「青海へ配属されて行った」ことの理由説明になっている。

例8) はエの型である。

8) 我们内部很严格的，因为我们都想长久做下去，纪律很严，如果谁迟到，要扣钱的，临时误场不来，像今天那位歌手，要罚她好几天的工资，我们唱一晚一人能挣差不多十元、···『北京人』146頁

私たちの内部は厳しいです。みんな長く続けていきたいと思ってますから。規律が厳しいんです、遅刻したらお金を取られるし、出番に遅れたら、今日のあの歌手のように、何日分もの給料をとられます。一晚歌ってひとり十元程度ですから、···

8) は、A、B、Cがいずれも独立句であるため、AとBの先果後因型のようでもあるし、BとCが先因後果を形成しているようにも見える。Cの最初の分句の内容「規律が厳しい」ことは、先行句Aの「私たち（歌劇団）の内部は厳しい」ことと、近似した内容ではあるが、厳密には同一ではない。ここでは、

後続句C全体が、先行句Aの内容を具体的に詳しく説明していると理解できる。

上の諸例のように、二重因果句であってAとCが厳密には同一内容ではない例は、本稿のデータではU型の例のみが見られなかった。ところが、AとCが同一あるいはきわめて近似した内容の場合は、U型は多数見られるのである。U型がはっきりした先果後因であることがその理由であると考えられる。以下に、そのような例を挙げる。

例9) はU型である。

9) 那个福利吧，我们每天有那个远郊补助，因为我们是迁厂单位。我们原来在西城区，是属于西城区，宣武区，西便门儿那点儿。啊，六，六，六六年迁门的吧？所以我们每天有那个远郊补助我们厂，三毛。「当代」62頁

福利ですが、毎日遠距離手当がついています、私たちは職場を移りましたので。もともとは西城区に、西城区、宣武区、西便門のところに属してました。あ、6、6、66年に移ったんでしょう。それで、毎日遠距離手当があるんです工場で、3毛です。

文中の先行句Aと結果句Cにおいて、「毎日遠距離手当が付く」という同一内容が、ほぼ同じ語句・表現を使って表されている。すなわち、結果句Cは先行句Aの内容を繰り返している。

次は、U型であるが、Cの句頭に呼応標識がない例である。

10) 通过这段时间工作呢，就是出差的机会也比较多，因为我这个家庭负担呢不怎么太重，这个孩子呢也都这个逐渐都长大了，都能自理了。自己出差的机会呢也就比较多。我出差这个地方哪，嗯，比较多的地方是哪儿呢？··「当代」5頁

この期間を通しての仕事は、出張の機会がわりに多いです、家の負担はさほど重くないですから、子どもがだんだん大きくなって、自活できるようになりましたので。自分で出張の機会がわりに多いんです。出張の場所は、ん、わりとよく出張するのはどこかというと··

10) では、先行句Aの内容「出張の機会がわりに多い」ことが、結果句Cにおいてほとんど同一の語句・表現によって再び繰り返し表されている。

U型の次に多く見られるのがエ型である。11) はエ型の例である。

11) 我现在住着三居室。嗯现在家里就两口人。平时两口儿人。嗯，有时候儿呢，就是因为外孙子在我这儿，现在都在托儿所，户口也就在这儿。所以平时呢，就

是我和我爱人，嗯，过节假日啊。・・・『当代』188頁

今は三部屋のうちに住んでいます。ん、今うちはふたり家族です、ふだんはふたりです。ん、時々外孫が私どものうちにいますので、今は託児所ですが、戸籍がここにあるんです。それでふだんは、私と夫のふたりだけなんです。ん、休日の過ごし方ですが、・・・

ここでは、「普段はふたりである」ことが、先行句Aと結果句Cの二箇所で見られ、表現を少し違えながらも繰り返されている。

12) もエ型である。

12) 骑车，不过我不敢骑的太快。因为现在这个马路上呢，有很多年轻人呢，骑车挺不注意的。嗯，有时候儿就从你旁边儿就抄过去了。所以我胆儿也比较小，我骑车不敢骑太快。我不太常坐车，・・・『当代』32頁

自転車に乗るのは、でもスピードは出せません。このごろは道路に、若い人が多くて、とても不注意に走らせますから。ん、わきをすり抜けていくこともあります。それで、私は気が小さいし、自転車を速く走らせるなんてできないんです。あまりバスには乗りませんが、・・・

ここでは、「速いスピードで自転車に乗れない」ことが、先行句Aと結果句Cにおいて、きわめて近似した表現で繰り返されている。

ウ型とエ型に共通した特徴は、原因句Bが句号でしめくくられていることであって、これは、先果後因の性質傾向が強いということである。先行句Aと結果句Cの内容が重複している例は、上のようにウ型とエ型に圧倒的に多く見られるが、ア型、イ型にもわずかに見られる。13) はア型の例で、“因为”は“就”と呼応している。

13) 高中以后，回来以后哇，上了两年班儿。完了以后呀，就不上了。因为社会上那么复杂，再说挣钱挣那么少，得了，我说我就不去了。把工作一辞，就家待着了。『当代』299頁

高校の後、帰ってきてからは、二年ほど仕事に就きました。終わってからは、やめました。というのは、世の中は複雑だし、それに金は少ししかかせげないし、しょうがないやと、もう行かないって言ったんです。仕事を辞めて、家で待業となりました。

ここでは、「仕事をやめてしまった」ことが、先行句Aと結果句Cにおいて、繰り返されている。

14) はイ型である。

14) 下班呢, 那车就不好坐, 因为这单位车跟着公共汽车, 还有这个自行车, 什么车都在这个时间里边儿集中到路上来了, 所以这段时间车特别不好坐。『当代』273頁

退勤は、この車（職場の車）は乗りにくいです、というのは、職場の車はバスのあとにくっついていて、それに自転車も、どんな車もみんなこの時間帯に路上に集中しますから、それでこの時間帯はとりわけ乗りにくいんです。

「退勤時に職場の車は乗りにくい」ことが、AとCで繰り返し述べられている。

以上のように、結果句Cは、先行句Aの内容の繰り返しであり、情報的には余剰である。したがって、文体意識が働き推敲、整理を経た『北京人』では削除の対象となって、一件も見られないのであろう。一方の、『当代』に多く見られるのは、自然な談話にくりかえし現象がよく見られる⁵⁾ ことによっても説明できるであろう。

ウの型は、AからBへは先果後因であるが、BとCは、先因後果であり、結局、全体としては先因後果型でしめくくっていることになる。⁶⁾ すなわち、先因後果で終わらせるために、結果の内容の反復をしているとも理解できよう。Cで表される内容は古い情報であるにもかかわらず、Cが付け加わるのは、因果句の基本形式とされる先因後果型でしめくくるほうが、落ち着きがよいということであろうか。

このように、先因後果型に傾くもののある一方で、それでは、その逆の先果後因型の型は、どんな時にどんな理由で選択され使用されるのであろうか。以下にそれを考察する。

先果後因型の選択要因

先果後因の型は、主題に対する補足的な原因・理由説明であるとされる。

この型の選択使用に談話的要因がはたらいていることは、インタビュアーが新たな話題を示し、解答者がそれに答えるような場合の例において、見てとることができる。

15) 身体情况, 我们家里边儿就我还稍微好点儿, 啊, 因为我也在学校教体育吧, 也跟学生有时候儿一块儿活动活动。我爱人身体不特大好。……『当代』223頁

健康状況は、家族の中で私だけが少し良好です、ええ。なぜなら、私は学校で体育を教えますでしょう、生徒とときにはいっしょに運動しますから。妻

は体の具合があまりよくありません。

上の引用部分は、ひとつの話題についての発話を終えて、次の新たな話題「健康状況」について語り始めた箇所であり、引用部分は新しい段落の冒頭に置かれている。このように、複数の話題を与えられて順次それに答えていくという談話形態の場合、まず主題を提示し次に題述が続く、という主題—題述による談話展開の型が多く見られる。題述部分ではまずは骨子を答え、その具体的、詳細な説明をその後で追加する、というパターンを取り易いであろうことは容易に推測できる。こうしたことが、先果後因型の選択を誘発しやすい一つの原因ではないだろうか。

上の他に、補足説明が必要となる場合とは、どんな場合であろうか、いくつかの要因をみつけることができる。

まず、談話の流れの中では、聞き手は先行文脈を談話の枠として、後続文脈の内容を予測する。⁷⁾ 予測した内容に反するものが来たときには、特に説明が必要となるであろう。以下はそうした例である。

16) 听听咱们自己的对外播音，那播音员多半是国外请的专家，播的相当流利，标准；也听听B.B.C.，不听美国之音，因为它那美式英语和我不搭界；再说……
【北京人】564頁

自分たちの海外放送を聴きました、アナウンサーは大半が国外から呼んだプロで、なかなかうまいし、標準語でした；B.B.C.も聴きました、ボイスオブアメリカは聴きません、アメリカ式英語は私には関係ないですから、それに……

上の例では、「听」が主要動詞になって連続して使われている。自分たちの放送を聴き、B.B.C.を聴き……と談話が進展していく過程では、次に予測されるのは、何か新たな別の放送を「聴く」ことではないだろうか。ところが、「聴かない」と否定形が突如現われる。これは談話の流れの中で聞き手の予測に逆らうので、説明が必要となり、後因型の因为が現れる、ということではないだろうか。

例17) は隣接する前件と後件の内容に矛盾が見られる場合である。

17) 那时候，房闲，人也少，买房，租房，随你挑。现如今盖了这么多楼，房子还是不够住，就因为人多呗！【北京】63頁

あの頃は、部屋も空いてたし、人も少なかったから、買うのも借りるのも意のままに選べた。今ではこんなにたくさん家を建てているのに、まだ足りないなんて、人が多いからでしょう！

「たくさん家を建てている」ことと、「家が足りない」ことは内容的に矛盾

しているため、説明が必要となる。

逆接の接続詞や、逆接のムードを表す副詞が現われる場合も、聞き手になんらかの矛盾、対立を予測させるであろう。18) では副詞“倒是”が使われている。

18)・・・高考虽然班里大部分同学都考上大学了哈，我要考也不一定考不上。所以现在呢，嗯，倒是不后悔，因为我们家本来人口就少，考上大学不定上外地，上，上，上哪儿呢，家里没人照顾也不行。【当代】19頁

・・・受験は同級生の大部分が合格しました、私が受けたとしても、必ずしも受からなかったとは限りません。で今は、かえって後悔せずにいます、というのは、うちは家族が少ないので、大学に受かったらよその土地へ行ってたかもしれない、ど、ど、どこへ行ったとしても、家に世話する者がいないのはだめです。

「大学受験をしなかったのに、かえって後悔していない」ことは説明を要するため、補足説明がされているのであろう。

19) は、先行句の内容と対立するあるいは対比される内容の場合である。

19) 她们家呢，准备是，四十五桌，我们家准备是三十桌。因为亲戚有限，哈。【当代】123頁

彼女の家では、用意したのが45卓、私の家で用意したのは30卓です。親戚が限られていますから、はあ。

ここでは、新婦側の45卓に対して新郎側の30卓という不均衡な数字が出てきたため、説明を要するという事ではないだろうか。

この他に、先行句で話し手の判断、評価、主張、説明などを表している場合に、先果後因型が多く見られる。

20) 我本来以为，选择考一门，拿一门的结业证书这种自学办法，对我比较合适，因为有些课程，好象在初中、高中和后来十几年的社会生活中，都翻来覆去地学了好多遍了，可以省点事。【北京人】419頁

ひとつの科目を選んで受験し、その学科の修了証書をもらうという独習の方法は、自分にあっていると、始めは思っていました。学科の中のあるものは、中学、高校、それからその後の十数年の社会生活の中で、何遍も繰り返し勉強したので、手間がはぶけると思ったんです。

この例では、「独習方法が自分にあっている」という判断の根拠を、先果後因によって説明している。

21) 说那个到了那儿哈，那车，那个毛纺厂吧还不错，因为它有五五八年建成，有多少年历史了啊，可以说。『当代』160頁

あそこのことを言えば、あの、あの紡績工場はすごいよ、5、58年に建設したんで、歴史があるからね、と言えるね。

「あの紡績工場はすごい」は話し手の評価を表しているが、その評価の根拠を補足説明している。

22) 电影呢，除了学校组织的，我是很少看的，因为没有时间去排队买票。『当代』31頁

映画は、学校で行くほかは、あまり見ないんです。並んで切符を買う時間がありませんから。

ここでは、先行句で“是・・的”構文を使っていることから、その内容である「映画をあまり見ない」ことが単なる事実としてではなく、話し手によって主観的に捉えられた命題として提示されている。

23) 不过现在呢都有电视，所以现在的注意力，主要集中在电视上。电视我基本上每天都看，吃饭的时候儿先看看新闻联播。因为从这个节目当中呢，可以了解一下国内外的重大事情。『当代』30頁

でも、今はみんなテレビがあるので、注意力がテレビに集中しています。テレビは基本的に毎日見ますが、食事の時はまずニュースを見ます。ニュース番組の中で、国内外の重大なことがわかりますから。

この例は、上の諸例と違って、先行句の述語動詞や構文などに特徴があるわけではない。テレビ番組の中で「ニュース番組を見る」ことは単に番組選択という話し手の行為を表しているに過ぎない。しかし、その選択行為には話し手の主体的な判断が働いていることを、話し手が特に伝えたい時には、補足説明が続くということではないだろうか。

中国語の特性としてしばしば挙げられる事柄のひとつに、先に主要部を述べ、後から修飾部などを述べるという事柄の述べ立てかたの順序に関する傾向がある。これにかなった例をひとつ挙げておく。

24) 这都不是长久之计，我自己有一千钱多块钱，又集到一点资，承包了一间饮食店。偷偷干的，用另一个人的名字，因为我有正式工作。『北京』122頁

これは長いこと考えた計画じゃないんです、自分で千元あまり持っていて、その上に少し元手を集めて、飲食店を請け負いました。こっそりとしたんです、他の人の名前を借りて、私には正式の仕事がありましたから。

上に挙げた諸要因は、先果後因型に広く見られる傾向を示しているに過ぎなく、上の要因も単独ではなく、重なり合って用いられているものも多い。いずれにしても、先果後因型は、先行句によって形成される文脈に依存して選択される傾向が大きい、談話的な性質を備えた型であると言ってよいだろう。

まとめ

今回の調査では、自然な談話と推敲された談話の二種類の資料の間に見られる因果表現の使用状況の差異、および因果句の種類と文脈依存性を、とくに因果句が前後句との間にもさらに因果関係を結ぶという特有の文脈依存のかたちについて、考察した。調査の結果は以下のようにまとめられる。

- 1 自然な談話をそのまま文字転写した「当代」のほうが、推敲・整理された「北京人」よりも、因果句がはるかに多く使われている。
- 2 因果句の基本型とされる先因後果型と、後から補足的に原因・理由を加える先果後因型との使用頻度は、二種の資料のどちらでも大差ない。
- 3 因果句の多数は、因果句の内部で因果関係を完結しているが、中には、前後文脈との間にもう一つ別の因果関係を形成しているもの（二重因果句）がある。
- 4 二重因果句は、「当代」のほうが「北京人」よりもはるかに多数見られる。その中でも、先行句の内容を結果句において反復する形式は「当代」にのみ見られて「北京人」には皆無である。
- 5 二重因果句の中で、先行句の内容を結果句において反復しているタイプは、その反復の結果、因果句全体が先因後果型となって落ち着いている。
- 6 先果後因型は、談話の流れの予測に反するような内容が現われたとき、或いは、話し手の判断、評価、意見などが提示されたときに選択されやすいという傾向が見られる。

因果句はその内部完結性が高いにもかかわらず、自然な談話の中で、より多数が使われている。これは、自然発生的な発話は文脈、状況などの要素への依存度が高いという一般的な言語原理に反するように見えるが、話し言葉ではその場での聞き手の理解を促すために必要な要素は明示されるという現象も、一方では確実に見られることを示しているのではないだろうか。

今回は、因果標識がその本義を保持している例のみをとりあげて、談話の中での見直しを試みた。談話内での因果標識は、“所以”に顕著に見られるよう

に、因果標識であることを超えて、談話推進のための標識として機能する一面があるようである。このような働きについては、因果だけでなく他の接続詞をも視野に入れて、後の機会に稿を改めて論じたい。

注

- 1) 分句は文中の節に相当する単位、句子は文に相当する単位であり、通常、分句と分句は逗号（カンマ）で区切られ、句子と句子は句号（マル）で区切られる。ただし、中国語では分句と句子の構造上の形態的な違いは明確ではない。なお、本稿では分句と句子の区別が問題にならない限りにおいて、両者を総称して句と称することがある。
- 2) 廖1986では、“原来”が置かれる形式も先果後因型としている。本稿の調査にも少数であるが、例が見られた。また、先果後因のタイプには、「…、是因为…」の形式もあるが、本稿の調査データにはほんのわずかしは見られなかったため考察対象からはずした。なお、情報構造の観点からのこの形式の専用論考として加納・近藤1988がある。
- 3) 大滝1992では、“所以”の単用形式は因果関係は表さず、語気を示すに過ぎないとしている。本稿の調査データでは、必ずしも語気とは言い切り難いが、因果関係の見出し難いものが多いことはたしかであり、むしろ談話を進めるための標識として機能しているようにも思える。
- 4) 王・張・卢・程1994, p. 141、高・王1996, p. 450
- 5) スタッブズ1983, p. 41
- 6) 譚1990は、このような二重の形態が、転析句と因果句のみに見られることを指摘している。また、譚のデータは論述文を中心に書き言葉から収録したものであるが、そこでは、原因・理由の部分が繰り返される“(因为)…、所以…、因为…”の形式も同時に見られるとしているが、本稿のデータには見つからない。これは、二重因果句を帰結句で終わらせるか、原因句で終わらせるかの違いであるが、おそらくこれは、論述性の高いデータと、自然発生のとりとめのない発話との性格の違いに起因する差であろう。
- 7) スタッブズ1983, p. 106

主要参考文献

- 高更生・王红旗等 1996 <汉语教学语法研究> 语言出版社、pp.449-451
- 加納光・近藤健治 1988 中国語の主従複文の構造、「ことばの科学」1号、名古屋大学総合言語センター
- 廖秋忠 1986 现代汉语篇章中的连接成分，<中国语文>第6期，pp.413-427
—— 1989 篇章中的管界问题，<中国语文>第4期，pp.250-261
- 林裕文 1984 <偏正复句> 上海教育出版社
- 刘月华・潘文娉・故犇 1983 <实用现代汉语语法> 外语教学与研究出版社
- 罗日新 1995 关联词语纵横谈，<语言研究>第1期，pp.28-32
- 吕叔湘 1982 <中国文法要略> 商务印书馆、pp.386-406
- 大滝幸子 1992 中国語複句文の接続関係を決定づける諸要因—順接・逆接の分析を通して見いだせること—、「文化言語学—その提言と建設」、三省堂、pp. 958-976
- スタップズ，マイケル(Michael Stubbs) 1983 *Discourse Analysis The Sociolinguistics Analysis of Natural Language*, Basil Blackwell Ltd. (邦訳：南出康世・内田聖二共訳「談話分析—自然言語の社会言語学的分析」、研究社、1989)
- 譚达人 1990 含双联分句的复句，<中国语文>第6期，pp.422-426
- 庄文中 1990 <句群>，人民教育出版社
- 王维贤・张学成・卢曼云・程怀友 1994 <现代汉语复句新解>，华东师范大学出版社，pp.122-143

談話における“所以”の用法と機能

今井 敬子

0. はじめに

現代中国語の連詞については、従来、複文内あるいは隣接する文と文の範囲内で論じられることが多かったが、より広い談話の範囲に視野を置いて観察すると、また違った現象・特徴の見られることを、連詞“因為”と“所以”の呼応による因果表現を例に、拙稿（1998）で明らかにした。今回はその結果をふまえて、単独で使用される場合の“所以”が、因果標識を越えた機能もあわせもつ点に着目し、そのような“所以”の用法と機能について分析を試みる。

小論ではまず、談話の中で単用される“所以”の作用範囲の広さ、因果関係の重層性など、複文レベルなどでの調査では見出しにくい諸特徴を挙げる。次に、前件・後件の間の意味関係の差から発する“所以”の諸機能についてとりあげ、それらの間の関連性、連続性について考察を加える。

用例は、《当代北京口語語料》（北京語言学院語言教學研究所、1993年）から収集した。本資料は102名の北京在住者の個々人を対象に、用意した複数のテーマ（経歴、家族、職業、生活、趣味など）について、インタビューを行い、その口述内容の録音をそのままのかたちで文字に起こしたものである。インタビューといっても質問者の発話は記録されていないため、解答者の独話形式の体裁になっている（ただし部分的には、解答者が質問者に問いかけたり、同意を求めたりしている個所が見られる）。したがって、小論では、独話を対象にした考察が中心となる。

1. “所以”の単用による標準的因果表現形式

“所以”が単用されるときは、a)のように複文の中の後続する節の冒頭に

おかれて、先行する節を前提とする場合と、b)のように文頭に置かれて、先行する文を前提とする場合とがある。¹⁾

a) ——p——，所以——q——。

b) ——p——。所以——q——。

いずれの場合も、前件(p)で表された内容を原因、理由、きっかけなどとして、その結果を後件(q)で述べることから、前件と後件との意味関係は因果関係と称せられている。

“所以”の単用が規範的・標準的に用いられているのは、1)や2)のように、前件と後件が隣接し、かつ、両者の間に一対一の明白な因果関係が認められる場合である。

1) 这些年从经济上也，也缓不上来什么，所以家里谈不上什么摆设儿，这个这个电气化，根本谈不上，就这样了。128頁<ここ数年、経済面でも改善がなにもありません、だから家では家具だとか、電化だとか、まったく話題に登らなくなりました、こんな次第です。>

2) 再有一个呢，那个自己呢，注意加强身体锻炼。所以呢，身体逐渐好起来了，胃病也基本上没有了。191頁<もうひとつ、自分で体を丈夫にするように鍛えています。それで、だんだん健康になり、胃病もほぼなくなりました。>

実際の談話では、上の例に見られるような規範的な要件を外したものが、広範囲に見られる。すなわち、前件と後件は必ずしも隣接していなかったり、因果関係については、それが必ずしも一対一ではなく重なり合っていたり、また、因果関係が必ずしも明白でなかったり、さらには因果関係の見られないような場合である。以下に、そうした具体例を順に追っていく。

2. 談話の中での“所以”の特徴

2. 1. 作用範囲

特定のテーマについてまとまった内容のある話をその場で遂行する場合は、必ずしも直線的に話題が展開されるわけではなく、本筋の話の進行の途中で、関連する別の話が挿入されているような例が多く見られる。その場合、前件から後件に到る途中で、話が脇道にそれ、その後、再びもとの話に戻るときに、“所以”がしばしば用いられる。

3) 在广州可不行。广州一般人，什么都买不起，那儿太贵。…其实北

京最贵,那边儿也够贵的。社会治安那边儿也乱,太乱。所以今年他们说上广州我就没去。301頁<広州ではだめです。広州では普通の人は、何も買えない。あそこは物価が高すぎます。…実際には北京が一番高い、あそこへ行くとひどく高いですよ。治安も乱れていて、ひどく乱れています。だから、今年あの人たちが広州へ行くと言ったけれど私は行きませんでした。>

3) では、広州の話を進めるうちに物価の高さに話が及ぶと、物価に関して類似の現象が見られる北京に話題の中心が移り、その後、再び広州に話が戻っている。後件の冒頭に置かれた“所以”は、北京の挿話を飛び越えて前件と結んでいる。ここでの“所以”は確かに因果関係の結果の部分の導いているが、それと同時に、脇道にそれた話の軌道を修正して、本筋へと引き戻すための標識としてもはたらいていると理解できるであろう。

4) は、前件と後件の間に、さらに大きな間隔が見られる例である。

4) 日坛啊,啊,从那边儿来的时候儿啊。嗨,坐哪个都不顺,后来就有四十四,这不新通吗?啊,这四十四,可是从我那边儿啊,也得走个七分钟吧,差不多。我在哪儿?在禄米苍的,你知道胜化红星胡同儿吧,哎,红星胡同儿这不是个小街儿路口儿了吗?我在马路东边儿那胡同儿。一直撞到头儿呢,整个儿偏东边儿了,快到雅宝路在雅宝路跟那个马路中间儿了。上不着天儿,下不着地儿。嗯,车站不方便,对,骑车最方便了,骑车最方便了。所以我上中班的时候儿呢就坐四十四。44頁<日壇は、あそこから来る時は、どれに乗っても都合が悪く、後になって44号線ができました、これは新しく開通したんでしょ?この44号線は、私のところからは歩かなければなりません7分でしょ、だいたい。どこに住んでるかって?禄米倉よ、勝化紅星横丁を知ってるでしょ、紅星横丁は通りの入り口じゃないの?私は大通りの東側の横丁よ。まっすぐ行って付き当たったら、ひたすら東へ進むと、すぐに雅宝路に着いて、雅宝路上のあの大通りとの中間です。中途半端な位置よ。バス停までは不便で、そう、自転車が一番便利、自転車が一番便利です。それで私は早番、昼番で勤務の時は44号線に乗るの。>

4) では、質問者に居所をたずねられたらしく、それに答える個所から話が脇道へそれていく。やがて、もとの話題に戻るまでの、前件と後件の間隔は相当あるが、これほどの隔たりの後でもなお、“所以”によって、直前の文の内容(自転車が一番便利)との結びつきが優先されるのではなく、はるかに先行する前件での話題(44号線バス)に回帰することができるのである。ここでの“所

以”は、前件と後件を因果関係で結ぶはたらきをも保持している。

2. 2. 因果関係の重層性

実際の談話では、複数の因果関係が並列しているものや、先行する因果関係の後件（結果）部分が、前件（原因・理由・きっかけ等）となって、後続する節や文との間に新たな因果関係を作っているような、重層性が広く見られる。

5) 人家越放假, 我们越加班, 啊所以 a, 人们也不去想到去旅游去。

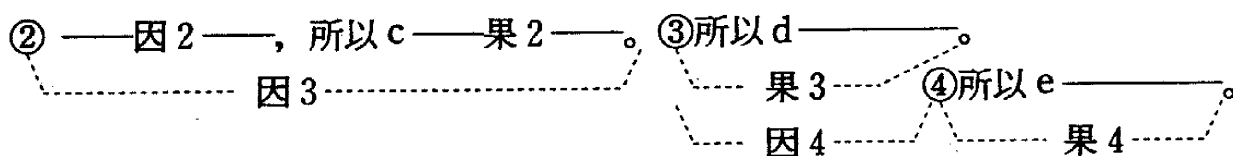
由今年这个八五年, 哦八四年开始, 旅游开始旺盛了. 所以 b 我们单位呢, 也做了很多的为旅游做的工作. 另外就是先进生产者啊, 啊, 在我们厂工会组织到去这个北戴河, 去旅游, 啊, 所以 c 引起很大兴趣. 所以 d 现在咱们这个青年人对于旅游事业啊, 感到非常好, 啊。

所以 e 现在很多职工啊, 都自动地组织起来旅游, 这是跟过去不同的. 199頁<人々が休暇をとれば、それだけ私ら（交通機関の職員—筆者）は残業が増えます。だから同僚は旅行に行こうなんてしませんでした。今年の85年から、84年から、旅行が盛んになりました。そこで私らの職場では、旅行のための仕事を多く手がけるようになりました。ほかにも先進的な職員は、職場の組合で組織して北戴河へ行っただんです、旅行で。それでおおいに興味を引きおこしました。だから今では私ら若い者は旅行事業に対してとても好意的です。それで今では職員の多くが、自主的に旅行を組織しています、この点は以前とは違っています。>

5) の5個所の“所以”の中で、“所以 a”だけが、前件と後件が一对一で因果関係を形成している。ほかの4個所の“所以”の間には、下の図のように因果関係の重なりが見られる。

① — 因1 —。所以 b — 果1 —。

② — 因2 —, 所以 c — 果2 —。



①と②は、それぞれの内部で前件と後件が因果関係を成している（因1果1及び因2果2）とともに、①と②のそれぞれの全文がともに前件となって、③を後件とする因果関係を形成している（因3果3）。そして、その③は今度は前件となって、④を後件とする因果関係をつくっている（因4果4）。このように、先行する節や文の内容を引き継いで、因果関係を次々と形成していく方式が頻繁に見られるのは、5) のように、時間の経過に沿って事態の変化や行為の連

続を追いながら話を展開している場合である。

次の6)でも因果関係の重なりが見られるが、連続使用されている“所以”の最後のものは、必ずしも因果を表しているとは理解しにくいものである。

6) 有时候我也顾不上,反正早晨,五点多吧,就从,从家就出来了,到这儿上班,一直白天也回不来,我在北,城里住,嗯,来回跑通勤。嗯,直到晚上吧,将近七点我才能到家。所以a一天不在家,所以b对孩子的教育就差一些,所以c这个这方面儿就差多了。141頁<私も時には(子どもを)かまっています。早朝、5時過ぎには、家を出て、ここまで出勤します。ずっと日中の間、帰宅もできません、私は北、町中に住んでいますので、往復とも通勤しています。夜になって、7時近くにやっと家に帰ります。だからまる一日家にいなくて、それで子どもの教育は不十分です、だからこの方面(子どもの教育面—筆者)はだいたい行き届かないんです。全体的に家庭のことを言うなら、だいたいこのようになります。>

6)の3個所の“所以”の中の“所以a”から“所以b”へかけては、因果関係の重なりが見られる。すなわち、「早朝出勤と遅い帰宅」が原因となって家には「まる一日不在」の状況が出現し、さらに、「まる一日不在」であることが原因となって「子どもの教育が不十分」である、というふうに、尻取り式に因果の連鎖ができています。最後の“所以c”は「子どもの教育は不十分」と「この方面(子どもの教育面)は行き届かない」のふたつを結びつけているが、この両者は、同一内容をやや表現を変えて述べているだけである。しかし、この繰り返りは単なる繰り返しではなく、因果による展開方式によって引き出した結論を、再度述べることで、この話全体をまとめ、終結させるはたらきをしていると理解できる。

このように、話のまとめ・終結の個所に“所以”が用いられている例は、話し手の判断、見解、主張、推論などの主観的な要素が後件にくる場合にもよく見られる。この用法については3節で後述する。

2. 3. 言語外の因果関係

“所以”は、必ずしも常に、言語内で明示された因果関係について用いられているわけではなく、言語外の事実によっている場合もある。

7) 哦,我们全家四口儿人都工作。哦,我的,两个孩子,大闺女,在,单位十打字员。哦,二孩子是男孩子,在出租汽车公司,开汽车。所以他们

的工资都比较高。我们生活都是补交富裕。52頁<我が家は四人家族全員が働いています。子どもふたりは、長女は職場ではタイピストをしています。二番めは息子で、タクシー会社で運転手をしています。それでふたりの給料は多いほうです。私たちの生活はわりあい豊かです。>

7) の文中の“所以”の前後が、因果関係で結ばれていると理解するためには、問題になっているふたつの職業が一般に高収入であるという言語外の知識が必要である。

8) 建了这个馆以后呢,这个总政啊,有一些个人哪,就选发一些个呀,当讲解员的。条件啊,较比高一点儿,一个是口齿得好,一个是面貌得好,体质得强。所以我这大女儿呢,就在这个,就被选中啦。 68頁<この(軍事博物)館が建ってから、軍の総政治部は、何人か、何人か選びました、解説員にするために。条件は、わりに高く、ひとつには話し方が上手であること、ひとつには容貌が優れていること、体が丈夫であることです。それで、私の上の娘が、その中に、選ばれました。>

8) では、解説員に要求されるすべての諸条件を娘が備えていることが、前文脈で明示されているわけではないため、聞き手にはその知識がないと推定できるが、それでも“所以”が用いられている。

3. 派生的機能

前件と後件の間に必ずしも明白な因果関係が見られないが、話の終結部に“所以”が置かれて、話のまとめを引き出すようなはたらきをする用法がある。一方、判断、主張、推論、意見などとそれらの根拠を述べる時に、終結部に“所以”が置かれる形式が見られる。また、因果関係の見られない極端な例として、発話を単につないでいる機能のみと思われる例がある、本節では、こうした諸用法をとりあげていく。

3. 1. 話題の終結

9) 工资这么一分呢,就剩下的就是太少了。所以 a 就是嗯,像教师长工资吧,从一月份给我们长哈,长到现在,还没信儿呢。……(中略)……原来说放假前给我们补上。现在也没也没信儿了。嗯,所以 b 豪夺问题也解决补了。不过我们普遍的这个老师来说,283頁<給料はこうして分けると、残りはほんのわずかです。それでつまり、教師の給料を増やす

というような、一月から今までの分を増やすんですが、まだ、何の通知もありません。…(中略)…もともと休暇の前に補填するって言ってたんですが。今でも連絡がありません。で、多くの問題が解決しきれずにいます。でも、私たち一般の教師からすれば、…>

文中の“所以 a”は通常の因果関係をあらわしているが、“所以 b”の場合、直後の「多くの問題」は、仕事上の待遇に関する様々な問題を指していて、これが主たる話題となっている。7) で述べられている給与増に関する問題は、その多くの問題の中のひとつである。“所以 b”に導かれる後件に対応する前件はどこにも見出せず、因果関係は形成されていない。“所以 b”は、主たる話題を終結させるための前触れの役割を担っていると言えないだろうか。

10) 那确实是,工人生产出东西,那就是说还要回到这个群众手里,是哇。可是你这质量不好,那你就直接影响到生活的需要。所以反正我们一天到晚什么事儿都,都遇得上。99頁<たしかに、労働者が製品を作るが、それは大衆の手に戻されなければいけないんです、そうでしょう。しかし、質が悪ければ、生活での必要に直接影響します。で、いずれにしろ朝から晩までどんなことにも出くわします。>

上例は、販売員として生産、販売、消費の関連を話題に、販売現場での問題を述べたあとの、最後の部分である。10) の“所以”もまた、因果関係で対応する前件と後件を見出せなく、話をまとめて終結させる働きをしていると理解できる。このように、いわばまとめを導く“所以”に後続する表現には一定の傾向がある。7) の「多くの問題がある」、8) の「どんなことにも出くわす」のように、非具体的な内容をもってまとめとしている場合がよく見られる。その極端な例が11) である。

11) 现在要求是比较,比较严格。你必须得认真备课。因为它现在呢,嗯,每天晚上的时候儿吧。有时候儿要备备课。嗯,如果,嗯中午呢,有时候儿吃完饭以后吧。在学校吃完饭以后,还要处理作业。所以,在,在学校工作是这样。在家里头呢,…… 27頁<今は要求がわりあい、わりに厳しいです。まじめに授業の準備をしなければなりません。なぜなら今は、毎晩、準備が必要な時もあります。もし、昼なら、時には食事のあとで、学校で食事が終わってから、なおも宿題を見なければなりません。で、学校の仕事はこんなふうです。家では…>

ここでの“所以”も、前件と後件の対応が見られなく、ひとつの話題の終結部分に位置していると見ることができる。しかし、その直後に来る「学校の仕

事はこんなふうです」は、実質的な内容をもたず、情報的には何も付け加えていない。

話題の終結部に“所以”が現れるもうひとつの場合は、判断・主張・意見・推論などをまず述べて、次にその具体的な説明、事例などを続け、最後に再び主張などが、最初の時とほぼ同じような語句によって示される、というパターンである。

3. 2. 主張・判断・推論などの反復

論証の展開形態としては、一般的主張を述べてから個別の例証を挙げる演繹型と、個別の事例を挙げてそれを証拠に一般的主張を導く帰納型とが対照的であるが、その両者を重ね合わせたような、主張→事例→主張の形態がここでとりあげるものである。2度めの主張の直前に“所以”が置かれる。主張と事例だけでなく、判断・意見・解釈・推論などと根拠・補足説明などの場合も同類とみなすことができる。

12) 嗯,就,就当当时就想,就是说到国外去玩儿玩儿,看看。到国外到底是什么样儿,和咱们国家有什么区别,是哇,嗯,就有那么一个心情出去的。嗯,当坐上飞机以后心情就不一样了,就那个滋味儿不一样,就觉得哎哟这,一过这海关,好家伙,就,再想回来可不容易了。嗯,不同意就不回不来,所以这个心情就不一样了。 141頁<当時は、外国へ行ったら遊んだり見たりしようと思っていました。外国へ行ったら結局どんななのか、我が国とどう違うのかという気持ちで出かけたんです。飛行機に乗ると、気持ちが変わりました、心持ちの変化です、つまり、なんと税関をいったん通れば、びっくり、もう帰ろうとしても簡単にはできない。同意なしには、帰れないわけです、それでその気持ちが変わったんです。>

12) では、“心情不一了”という事態への判断があり、続いて具体内容、さらにその後、再び事態への判断が、最初とほぼ同じ語句によって述べられている。中間の具体内容は、気持ちの変化をもたらしたきっかけについて述べているようにも理解でき、また、気持ちの変化の内容そのものを述べているとも理解できる。

13) 这个啊, 要说从我小时候儿这个情况来说,这个就业问题是一个严重问题,因为那个时候儿没有分配制度。这个样子呢,就是说你认

识的朋友多,认识的人比较广,就能朋友托朋友这个样子,来找工作。哎,如果说你不认识人,那就是,那就即便是卖苦力气,也挺难找的。所以 a 比方说吧,你要是打算在清华大学,那时候随便做一个工作,你必须得有清华大学的这个,朋友,啊,哦在这边儿工作,这样儿他呢,通过他呢,给你介绍,你才能进去。……(中略)……所以 b 在这个旧社会,找一工作是很困难的。83頁<その、私が子どもの頃の状況から言うと、就職問題は深刻な問題でした。あの頃は分配制度がありませんでしたから。それで、知り合いが多く、顔が広ければ、友達に頼んで仕事をみつけてもらえます。知り合いがないなら、力仕事をさがすのさえむずかしいのです。だからたとえば清華大学で、あの頃自由に仕事がしたいなら、清華大学に友達がいなけりゃだめです、そこで仕事をするには、そうやって、彼が、彼を通して、紹介してもらって、やっと中に入れるんです。…(中略)…それで、旧時代の社会では、仕事ひとつさがすのもとても難しかったんです。>

ここでは、まず事実に基づく意見があり、その理由と具体例が“因为”と“所以 a”の呼応のもとに簡潔に述べられ、さらに、引用の中略部分で、事例が詳細に述べられて、“所以 b”以下で最初の意見を繰り返すかたちになっている。

14) 这些年好像气候都变了似的,我怎么觉得呀,……(中略)一直你看从冬天虽然不太冷,可是呢一直持续到什么“五一”什么的。过去,像二十年,五几年那时候儿吧,“五一”的时候儿就挺暖和了。像今年这“五一”的时候儿呢还不太暖和呢,就那样儿。所以好像这些年那个气候有变化。267頁<ここ何年か気候がすっかり変わったようです。なぜそう思うかっていうと、…(中略)…冬からずっとさほど寒くなかったけど、ずっとメーデーまで続いています。以前は、二十年、五十何年かの頃なんか、メーデーの時期にはずいぶん暖かになっていました。今年のメーデーの時なんかあまり暖かなくて、あんなふうでした。だからここ何年か気候が変化したようです。>

主張の部分では“好像”が使われているため、可能性のある事態についての推測的判断になっている。まず、推論を提示し、続いてその根拠となる現象を挙げ、最後に再び推論を、最初と同一の語句で示している。

このパターンでは、2度めの判断・主張・推論などは、多少の語句の言い換えはあっても、最初の内容をそのまま保持している。そして判断・主張・推論などが2度目に提示された直後に話題が終結している。したがって、判断・主

張推論などの繰り返しは、それまでの話の終結を導くための結論を提示しているとも理解できる。²⁾この繰り返しはほぼ定型化しており、“所以”の後に判断・主張・推論などが一度示されるだけで反復はない、という例はわずかに見られるだけである。その一例を挙げる。

15) 在这个基础上来进行呢业务的学习,我,我感觉这样儿是合适的。
所以过去的我们的安排,往往是比较错误的,哎,比较错误的,疏忽了政治,啊,这一点儿呢也及时受到了领导的批评。 85頁<この基礎(正しい政治思想をもつという基礎一筆者)をふまえて仕事の上での学習を進める、私はこうするのが正しいと感じます。それで以前の私たちのやりかたは、しばしば間違っていたんです。かなり間違っていました。政治を疎かにしたので、この点はすぐさま指導者の批判も受けました。>

15) では前件の内容「～するのが正しい」が根拠となって、後件の判断「～は間違っていた」が生じているが、前件の内容は同時に「正しい」という話し手の判断を表してもいるので、一方の判断がもう一方の判断の根拠となっている、という関係が見られる。

3. 3. 発話をつなぐ

前件と後件の間に因果関係が全く見られない場合にも、“所以”が用いられているものがある。それには、前後をつないでいるだけのものと、因果以外の別の意味が見られるものとの2種がある。

16) 我是河北医学院的啊,河北医学院最早是在天津,天津。后来天津,啊,在天津迁校以后呢,迁到保定,嗯,后来有从保定又迁到石家庄,
所以我毕业的时候儿呢,是从石家庄,石家庄毕业的。 22頁<私は河北医学院です、河北医学院は最初は天津にあって、天津、あ、のちに天津で引っ越してからは、保定に移りました、その後さらに保定から石家庄に移りました。ん、それで、私が卒業したときは、石家庄で、石家庄で卒業しました。あ、お金の問題については…>

16) では、前件と後件の間に因果関係は見られないが、話の展開の帰結の部分に“所以”が用いられ、その直後には、別の話題(経済生活)に移行している。

17) の例は、複数の“所以”が連続して使用されているが、そのうちで因果関係の見出せるものは一件のみである。

17) 嗯,那时候儿都是没有人的,很害怕。就是那时候儿,我小的时候儿这里都没人呆呢。嗯,挺荒凉的哈。所以 a 这个,我觉得这建国几年,这个三十多,三十多年了哈,变化挺大的。所以 b 这个各方面儿呢,在哎工业,农业,文教事业,环境保护这方面儿,都起了很大的变化。而且现在我们邮票厂也像各花园儿一样。真是,现在是一像里边儿像一个花园儿一样。所以 c 变化比较大的。真是,真是,这个气象万新哪,变化挺大的。所以 d 这个方面条件儿也比较好。181頁<あの頃は全く人がいなくて、恐かったです。あの頃、私が小さかった頃はこのあたりは住んでいる人がいなかった。荒涼としていました。それでその、建国何年かして、三十あまり、三十数年たって、ものすごく変化しました。それで各方面、工業、農業、教育文化、環境保護の方面で、大きな変化がありました。しかも今では我々の切手工場も花園のようです。ほんとうに、今では敷地の内部は花園のようです。それで、変化がわりに大きかった。ほんとうに、ほんとうに、様相がすっかり新しく変わって、変わりようが大きかったです。それで各方面の条件がわりあい整備されています。>

17) における“所以”の連鎖によって、以下の内容が関連づけられている。

———。所以 a———。所以 b———。所以 c———。所以 d———。
(荒涼) (建国後の大変化) (各面で大変化) (変化が大きい) (条件がよい)

“所以 a”は、直接的な意味の関連がない前後の内容をただ繋いでいるだけである。“所以 b”は、前件で「建国後に大きな変化があった」ことを述べ、後件では「各方面で大きな変化があった」と、前件に補足説明を加えている。また、“所以 c”に続く後件では、“所以 b”の前件での主張が繰り返されているに等しい。一方、“所以 d”は、前文脈での説明を受けて、その結果として「条件が整備されている」ことを述べている。かくして、“所以”の連鎖の中で、因果関係が反映しているのは“所以 d”のみであるが、その他の“所以”は、前後を繋ぎながら、話の展開と終結への道筋をつけていると考えられる。

次は、前件と後件が逆説の関係にあるとも理解できる個所で“所以”が使われている

18) 可是现在治安呢,并不能够像达到理想的一个效果。这是每个人是可能都有的,是不是?如果孩子今天出去了,回来晚了,或者是夜班晚了,那总是提心吊胆 de。所以这个没办法,是不是,这是没办法。269頁<でも現在、治安は、少しも理想的な効果をあげていないようです。

…たとえば子どもがきょう出かけて、帰りが遅くなる、或いは夜勤で遅くなる、そうするといつも心配でびくびくしています。で、しかたない、そうでしょう？どうしようもないんです。>

前件の「心配である」ことと後件の「しかたがない」と思うこととはむしろ逆説関係にあると理解できるが、順接の“所以”によって両者を結んでいる。次は対比的な事柄を“所以”が結ぶ例である。

18) 原来是没有上中学的,高中的,大学的没有。…(中略)……养家糊口。七八岁就得光着脚丫子穿着个裤衩儿就卖冰核儿。所以说这个现在就不好了。学龄前儿童都能上幼儿园,…178頁くもともと中学、高校、大学に進む者はいませんでした。…(中略)…働いて家計を助けたんです。7、8歳になると裸足で、女の子は短ズボンをはいて碎き氷を売ったんです。それで、今はそうではなくなりました。学龄前の子はみんな幼稚園に行けるし、…>

上の例では、過去と現在の子どもの状況を対比して述べているが、両者が“所以”で結ばれている。

このように、因果関係とは別の意味関係が、比較的明確に見られる場合でも、“所以”で結ぶことができる。³⁾

4. 発話行為レベルでの因果関係

ここまでの例は、発話内容の内部で因果関係が見られるものであったが、一方で、話し手と聞き手による発話交換という行為自体の中での因果関係が示される場合がある。

4. 1. 新話題の冒頭

“所以”は、前件の内容を前提にして後件の冒頭に置かれるのが、通常的位置であるが、これに反して話の冒頭に置かれる例が見られる。⁴⁾

19) 所以那个,对于这个物价这问题以前我也不管家,我从来也不管。家里都有母亲一个人管了,蛤。282頁くそれでその、物価という問題については以前は私は家計の管理もしていませんでした、私はこれまで受けもってきていません。家のことは全部母がひとりで切り回していますよ。>

上の引用部分は、家計・家事という新しい話題に入った冒頭の部分である。これはどう理解できるだろうか。与えられた話題を引き受けたという引継ぎの標識であろうか。

4. 2. 発話行為動詞を導く

20) 这段工作呢?我觉得当时也挺有意思。所以您问有什么意思,那就是当时年纪很小,我对汽车这行儿呢,很喜爱。 4頁<この工程の仕事?当時にとってはとてもおもしろかった。それでどんなふうにおもしろかったかと言うと、そりゃ当時は若かったし、自動車の仕事っていうのに、惚れていたんです。>

20) では、発話行為動詞“問”が発話内容の中に表われ、「私が～と言った、それであなたは～とたずねるんですね。」という意味を構成している。ただし、録音された内容を聴くと、実際に聞き手が質問している様子はなく、ある種の定型表現に近い用法と考えられる。

19)、20)の例は、対話という相互作用の中での使用特徴が表われたものである。

5. まとめ

“所以”が談話（独話）の中で単用される場合、その用法上の特徴は以下のよう整理できる。

1. “所以”の作用範囲の広さと重層的な因果関係

- 1) 前件と後件の距離：隣接するものから相当の隔たりまでが見られる。後者の場合に“所以”は話の本筋への回帰を導くはたらきをする。
- 2) 因果関係の階層性：一対一の関係から重層的な関係までが見られる。

2. 派生的機能

明確な因果関係を導くほかに、以下のような機能が見られる。

- 1) 判断・主張・推論などとその根拠を導く。前件が反復される定型がある。話題を収束させる前触れともなる。
- 2) 話の終結部に表われ、まとめの前触れとしてはたらく。事実・行為等を生起順に述べていく展開方式の中で多く使用。
- 3) 因果関係が見られず、発話を単に繋いでいくはたらき。連続使用が多い。話題を継続させ、その展開、終結へ向かう道筋をつけるはたらきとも理解できる。

上の派生的諸機能はいずれも、“所以”のもつ「帰結」の意味に着目したはたらきであり、かつ、話題の継続、終結に関わる点で談話的な機能であるといえる。前者については、“因为”と呼応して用いられる“所以”が、おおむね明確な「因果」の関係を導くはたらきをしている（拙稿1998）のに対して、単用される“所以”が「帰結」の意味を担う派生的機能をもつことは、その本義からして当然のこととも言えよう。後者の特徴を通しては、“所以”が談話の広がりの中で、その構成と展開に関わっている標識であることが見て取れる。

注

- 1) 語気助詞を伴ったり（たとえば“所以呢”）、発話動詞を続けたり（たとえば“所以说”）などの形式も分析の対象とする。以下、“所以”と称するときはこれらの諸形式も含めて指すことがある。
- 2) 拙稿（1998）の調査で、判断・評価・主張・説明などを表すときに、“所以・・因为・・所以…”の反復型がしばしば見られた現象と平行している。また、英語の場合も、類似した反復が結束性の連鎖を形成するという（Halliday&Hasan 1976, p. 256）
- 3) 邢1991では、同一内容が相反する意味の接続詞で結ばれ得る（たとえば、順接と逆接）ことから、話者の主観が接続の種類を選択すると指摘している。また、Halliday&Hasan 1976 (pp. 251-252) には、“and”が“yet”の意味で用いられる例示がある。
- 4) 発話の冒頭に置かれた“所以说”の例が、同じくインタビューに基づき編集した《北京人——一百个普通人的自述》（張辛欣・桑晔編、上海文芸出版社、1986年、p. 264）にも見られる。

参考文献

- 1) 陈建民 1984 《汉语口语》，北京出版社
- 2) Halliday, M.A.K.&Hasan, Ruqaiya 1976 *Cohesion in English*, Longman Group Ltd., chapter 5
- 3) 廖秋忠 1986 现代汉语篇章中的连接成分. 《中国语文》第6期, pp. 413-427
- 4) —— 1988 篇章中的论证结构. 《语言教学与研究》第1期, pp. 86-101
- 5) 罗日新 1995 关联词语纵横谈, 《语言研究》第1期, pp. 28-32
- 6) 吕叔湘 1982 《中国语法要略》, 商务印书馆, pp. 386-406
- 7) 大滝幸子1992 「中国語複句文の接続関係を決定づける諸要因—順接・逆接の分析を通して見いだせること—」, 『文化言語学—その提言と建設』, 三省堂, pp. 958-976

- 8) 谭达人 1990 含双联分句的复句,《中国语言》第6期, pp. 422-426
- 9) 邢福义 1991 汉语复句格式对复句语义关系的发制约《中国语言》第1期, pp. 1-9
- 10) 王维贤·张雪诚·芦曼云·程怀友 1994《现代汉语复句新解》,华东师范大学出版社, pp. 122-143
- 11) 拙稿1998「中国語の因果表現—談話における選択要因について—」、『人文論集』49-1、pp. 109-125

第2部 言語テキストと音声現象への応用的研究

第3章 曹禺「雷雨」の人称代名詞—言語面からの人物関係の検証—

第4章 声調言語に於けるピッチの“上げ”と“下げ”について —タイ語、蘇州語の筋電図—

曹禺「雷雨」の人称代名詞 —言語面からの人物関係の検証—

今井 敬子

はじめに

小論は、テキストの中で使用される言語標識を、テキスト全体を視野において位置づけ、そのはたらきの特性をテキストの流れの中で分析することを目的とする。具体的には、曹禺作の戯曲「雷雨」の台詞に見られる人称代名詞（二人称、三人称を中心に）を取り上げ、必要に応じて呼びかけ語も参考にしながら、語用論、談話文法論の観点から考察を加える。そして、テキスト内におけるそれらの標識の使用特性が、劇中の人物関係、人物特性をいかに反映しているか、具体的な人物に即して検証を試みたい。

小論は次のような構成になっている。

1. 主要人物とあらすじ
2. 人称代名詞の使用基準と使用範囲
3. 人物関係の個別検証
- 3.1 魯侍萍と周朴園
- 3.2 周蘩漪と周萍
- 3.3 魯四鳳と魯貴、周萍、周冲

なお、引用例は「曹禺文集 第一巻」（中国戯劇出版社 1988）所収の「雷雨」¹⁾から収集している。

1. 主要人物とあらすじ

主要人物は、炭坑を経営する周家の四人の家族とその下僕の一家・魯家の四人の家族である。周家は、主人・朴園（55歳）と妻・蘩漪（35歳）、朴園の先妻の生んだ長男・萍（28歳）と、蘩漪の生んだ次男の冲（17歳）がいる。朴園は絶対権力をふりまわす暴君的な夫、父である。蘩漪と継子の萍は不倫の関係にあったが、清算しようとする萍と、執着する蘩漪とが対立している。冲は純真で美しい夢の中に生きる人物である。

一方の魯家は、主人・魯貴（48歳）と妻・侍萍（47歳）、侍萍の連れ子である息子・大海（27歳）、魯貴と侍萍の娘・四鳳（18歳）の四人だが、魯貴は周家の下僕で、侍萍は家族を離れてひとり遠方で働き、大海は周家の炭鉱で働く労働運動の指導者、四鳳は周家の下女をしている。四鳳は周家の長男・萍と秘密の恋仲であり、萍の弟・冲からも想いを寄せられている。

30年前、南方の町にあった周家に仕える下女の娘・侍萍（当時は梅侍萍）は、御曹司の朴園と相愛関係になり、ふたりの男児（萍と大海）を生んだが、大海を生んだ直後に捨てられ、追い出された。30年の後、北方の地で、侍萍と朴園がはからずも再会したことから、侍萍が実は萍の生母であること、恋仲の萍と四鳳は同母兄妹であることなど、すべての秘密が明らかになる。衝撃で部屋を飛び出した四鳳と彼女を追った冲は、庭の電線に触れて感電死し、萍はピストル自殺をする。大海は失踪する。子供たちを失った三人の親が後に残され、そのうちの二人——侍萍と蘩漪は発狂する。

四幕構成のドラマは、ある夏の日の朝から翌日の未明までの短時間のあいだに、限られた空間（周家の客間と魯家）において始まり、展開し、終結する。主筋の四幕のほかに、プロローグとエピローグが設けられ、そこでは、時が移って10年後の冬、かつての周家の屋敷が今では教会付属病院に変わり、入院している蘩漪と侍萍を、老いた朴園が見舞いに訪れる。

2. 人称代名詞の使用基準と使用範囲

小論では、単数二人称と単数三人称の指示を中心にとりあげる。まず、多用されている二人称の使用から見ていく。

中国語の単数二人称代名詞には、“ni”とその敬語体“nin”の二形態がある。この両者は、上下・親疎の違いによる対人関係や場面に応じて使い分けられるが、“nin”は、尊敬、あるいは疎遠、“ni”は、親近あるいは軽蔑のニュアンスがあることはよく知られている。

「雷雨」のテキストのはじめから終わりまでの流れの中で、使用されている二人称代名詞を、指示者（発話者）と指示対象（二人称代名詞の場合はすなわち聞き手）の関係ごとに調べると、次のように大別できる。

- (1) “ni”あるいは“nin”の専用（基本的に一方だけを使用）
- (2) “ni”と“nin”の両用
- (2) について、同一場面における一連の会話を単位にして調査すると、つぎのように分けられる。

(2-1) 始まりでは“ni”あるいは“nin”の一方を使い、会話の進行(時間的経過)に従って、別の一方の使用に移行する。

(2-2) “ni”と“nin”の両者を一連の会話の中で交互に、あるいは移行のかたちで使用。

(2-3) ある会話(場面)内では“ni”あるいは“nin”の一方のみ、別の会話(場面)ではもう一方のみを使用。

(1)のような一方のみの使用は、“ni”については多くの人物関係について広く見られるが、“nin”のみの使用は限られている。その代表は子→親(指示者→指示対象)の場合である。たとえば、周家では、兄弟ともに両親を“nin”で指示し、魯家では兄妹ともに母を“nin”で指示する。父の魯貴のみ“ni”も使用される。従って、子→親の場合は“nin”の使用が標準的で、魯貴の場合はこの基準から逸脱しているものと理解できる。魯貴に対しては、息子の大海は終始“ni”で指示する。これは大海が、周家に卑屈に仕える継父の魯貴を軽蔑しているために、目上の尊敬すべき対象を指示する“nin”をつかわず、“ni”で指示するものと考えられる。又、娘の四鳳は、“nin”を基本にしながら“ni”を併用する。このケースは(2-2)に分類される。

“nin”の専用に準ずると考えられるのが、下僕→主人の場合である。その状況はやや複雑で、たとえば魯貴は、繁漪、萍、冲を“nin”で指示する。四鳳は、繁漪には“nin”を、冲には、“ni”で指示する。萍に対しては、両者を使い分けているため(2-3)に分類される。このように、魯貴と四鳳とでは使用状況に違いがあることは、ふたりが同じ下僕の身であっても、実際にはその立場が違っていることがうかがえる。

周家の主人・朴園は、人称代名詞で指示されることの最も少ない人物である。魯貴、四鳳は、代名詞を使わずに“老爺”で指示するが、これは“nin”の使用に関して敬語上の制約がはたらいているのであろう。しかし、第三幕で、名前を特定されていない下僕が“nin”で指示していることを考えあわせると、下僕→主人は“nin”が標準的と理解してもよいかもしれない。

(2)は(1)とはちがって限定された関係にだけ見られる。

(2-1)のタイプは、時間的経過にしたがって、指示者と指示対象の上下・親疎関係が変わっていくという特徴がある。顕著なケースは、侍萍→朴園で、ふたりがはからずも再会したとき、朴園に向かって、侍萍が徐々に素性を明かしていく過程に、“nin”から“ni”へのはっきりとした推移が見られる。また、周萍→侍萍は、初対面では“ni”を、後に四鳳の母であると知ってからは“nin”

を使う。こちらは一連の会話の中での移行ではないが、このタイプに準ずるものとして分類できる。

(2-2) は、指示者と指示対象の関係は単一で固定しているが、心理的な距離、発話効果などが要因となっているタイプである。“ni”と“nin”が同等の頻度で使用されるケースはなく、両者のどちらかが使用度が高い。顕著なケースは四鳳→魯貴で、“nin”が基本であるが、“ni”が一定程度(12件。この他、“nin 老人家”が2件)使用されている。四鳳→周冲は“ni”が基本だが、下女→主人の関係を強調する効果をねらった“nin”が2件見られる。この両ケースは、“nin”の連鎖の中に、時に“ni”が入り込むというかたちである。

また、大海が、労働交渉のために朴園に接見する場面では、冒頭のあいさつとそれに準ずる短い会話だけが“nin”で、その後は“ni”に切り替わる。こちらは一方からもう一方への移行のかたちである。

(2-3) は、指示者と指示対象が複数の関係をもつ場合に、その使い分けに応じて“ni”と“nin”が交替して使用されるタイプである。典型的なケースは、周萍→繁漪で、ふたりだけの場面(かつての愛人関係)では“ni”を、第三者の面前(母子の関係)では“nin”を使用する。また、四鳳→周萍は、会話場面のほとんどがふたりだけの場面であって“ni”が使用されているため、“ni”の専用のように見えるが、実は、第三者の同席する場面で“nin”を使用している例が一例あるため、両用して使い分けられていると考えてよいだろう。

単数三人称代名詞“ta”⁵⁾は、話者の眼前にいる人物を指示する場合(現場指示)と発話の中に現れる人物を指示する場合(文脈指示)がある。また、二人称の場合と違って、指示対象と聞き手が別の人物であり、聞き手の立場が“ta”の選択使用に影響する場合がある。

敬語上の使用制約が“ta”にも認められることは、木村(1990)に詳しいが、「雷雨」では、現場指示の“ta”は、用例が少ないため見極めがむずかしい。文脈指示の場合は、用例が不十分ではあるがそれでも、発話の相手(聞き手)の影響に関して一定の傾向が見られる。すなわち、子→親は、“ta”で指示している。下僕→主人は、魯貴と四鳳が、朴園に対して“ta”の使用を避け“大少爺”を使っている。一方、繁漪や周萍、周冲に対しては、聞き手が発話者寄り(魯家の家族など)のときは“ta”で指示していて、指示対象寄り(周家の家族)のときは、“ta”を使いにくいという傾向が見られる。

これとは別に、テキストの流れの中で“ta”を見ると、次の二点の用法におい

て顕著な特徴が見られる。

- (3) 文脈指示の場合、先行詞が前後の文脈内にないもの、あるいは、先行詞があってもわかりにくいものがある。この用法は全体として多くはないが、繫漪が指示者である例が最多である。
- (4) “ta”を使用して、三人称以外(一人称、二人称)を指示するような指示の変換がみられる。全体の数はわずかだが、繫漪に関するものが最多である。

以上の全般的状況に基づき次節では、上の分類の(2)、(3)、(4)について、主要人物の中の侍萍、繫漪そして四鳳の三女性に関心の焦点を置き、具体例を挙げながら分析を進める。

3. 人物関係の個別検証

3.1 魯侍萍と周朴園、周萍

魯侍萍の発話には、会話の進行にともなって人物関係が移り変わる場合の、二人称代名詞の典型的な用法が見られる。

「雷雨」には、三人の侍萍がいる。むかし周家の下女であった梅侍萍、周萍の「亡くなった」生母の侍萍、そして魯侍萍である。第一幕の最後の部分で、周萍の亡母・侍萍について、僕園と息子の萍の比較的長い会話があり、三人の侍萍の中で、まずは彼女にスポットライトが当てられる。僕園は、亡き妻・侍萍の写真を部屋にかざり、彼女の生前の習慣に従って夏でも部屋の窓を閉め切り、亡母に恥ずかしくない生活をするように、と自墮落な生活に苦しむ息子・萍にさとするのである。

魯侍萍は、八人の主要人物の中で最も遅く、第二幕になって初めて登場するが、彼女の出現が糸口になって、すべての秘密が発覚し、終局の破滅へと進むことになる。

彼女は、周繫漪に呼ばれて周家の屋敷を訪ねるというかたちで登場する。繫漪が、息子・沖の四鳳への純真な想いに危険を感じて(周萍と四鳳の関係を断とうとする気持ちもあり)、四鳳を解雇しようとし、母親の侍萍にそれをいいふくめるべく呼び寄せたのである。

以前は南方の無錫の地にあった周家だが、その後、ここ北方の地に居を移している。朴園に捨てられてから、あらゆる辛酸をなめ尽くした末に、今では魯貴の妻となっている侍萍は、夫と娘の働く屋敷が当の周家とは知らずに訪れる。

が、昔のままに保存された部屋の様子や、箆笥の上の「周家の当主の先妻であり、長男の亡母」の写真を見て、かつて仕えた周家であることを知る。

その後侍萍は、部屋を出る機会を逸し、入ってきた朴園とはからずも対面するはめになってしまう。最初は新来の下女と思って何も気つかなかった朴園だが、侍萍のものごとと無錫なまりの口調に何かを感じ取る。こうして始まるふたりの対話は、前半のクライマックスである。

朴園にたずねられて侍萍は無錫で育ったと答え、対話が始まる。最初は“老爺”（旦那さま）と朴園を指示し、人称代名詞はまだ使われない。

朴：（沈思）三十多年前、是的、很遠啦、我想想、我大概是二十多歲的時候。那時候我還在無錫呢。（物思いに沈んで）30年前、そう、ずいぶん昔だ、たしか、わしは20才といくつかの頃だったろう、あの頃はまだ無錫にいた。

侍：老爺是那個地方的人？ 旦那さまは無錫のかたでいらっしゃいますか。2-99

侍萍は、顔を会わせた当初から、相手が朴園であるとわかっていて、たくみに会話を続けていく。朴園が、むかし無錫で梅という娘の投身自殺があったことに言及すると、侍萍は四鳳の母だと名乗りながら、「梅という娘」を“ta”で指示し、町中でうわさとなった彼女の苦難の半生を語り聞かせるのである。

この間に、“老爺”での指示が3件あり、そのあと初めて“nin”が使われる。最初は次の例のように、“nin”のみの指示よりも丁寧度の高い“老爺、nin……”というパターンで使われている。侍萍が、梅という娘が実はまだ生きていること、しかもこの地にいることを告げると：

朴：甚麼？ 她就在這兒。此地？（なに、あれはここにいるのか、この地に）

侍：嗯、就在此地。（ええ、この地です）

朴：哦！（ああ！）

侍：老爺、您想見一見她呢。（旦那さま、お会いになりますか）

朴：不、不、謝謝你。（いや、いいよ、ありがとう）2-102

このあと、同一会話中に“老爺”と“nin”が併用されるかたちを中心に、“nin”が徐々に使用を増す（この間に“老爺”3件、“nin”2件）。

やがて侍萍は、かつて彼女が刺繍をほどこした朴園のシャツに言及し、朴園はついに、目の前の女が侍萍であると気づく。ここから、侍萍の指示のしかたは、“ni”に切り替わる。

朴：（徐徐立起）哦、你、你、你是——（やおら立ち上がり）お、お前、お前は—

侍：我是從前伺候過老爺的下人。わたしはむかし旦那さまにお仕えした下女でございます。

朴：哦、侍萍！（低声）怎麼是你？ お、シーピン！（声を落して）どうしてお前が？

侍：你自然想不到、侍萍的相貌有一天也会老得連你都不認識了。侍萍の容色が、いつの日にか見わけがつかないほどに衰えようなどとは、あなたは思ってもみなかったことでしょう。

朴：你——侍萍？ お前は——シーピンなのか？
（思わず筆筒の上の写真と魯媽を見比べる）

侍：朴園、你找侍萍嗎？ 侍萍在這兒。プーユエン、あなたはシーピンを探しているんでしょう？ シーピンはここにいますわ。2-103

最初はおずおずと朴園の質問に答えるだけであつたが、彼が切に欲している情報を少しずつ提供しながら、徐々に会話を主導するようになり、ついには自ら素性を明かすのである。このあと、侍萍は一連のふたりの会話の中で、ずっと“ni”で朴園を指示し続ける。

以上のように、“老爺”→“老爺と“nin”の混在”→“nin”→“ni”と、一連の会話の流れの中で指示のしかたが推移する。“老爺”から“ni”に至るまでの過程は、現在の魯侍萍から30年前の梅侍萍へと時をさかのぼって、朴園との関係を規定し直していく過程である。侍萍と朴園はそのほかの人物と違って、ト書きにおいて人物特性が詳説されることなく、「もっぱら対話と独白によって来歴や心理が明かされる」⁷⁾ため、第二幕のこの部分の一連の対話は、情報量がきわめて多い。

侍萍は、二度とふたたび訪れないことを朴園に約して別れる。ところがその後、はからずもまたもや朴園と顔を会わすことになり、そのときには“nin”で指示をする。第四幕の終盤で、出発しようとする周萍と四鳳を藜漪が遮り、夫の朴園を呼ぶ場面である。階上から降りてきた朴園は、二度と戻らないと言ったはずの侍萍を見て、思わず彼女の名を口走ってしまう。こうして、四鳳の母が実は周萍の生母であることが、いあわせた劇中人物全員の前に明らかになる。第四幕の山場である。このとき侍萍は、萍の生母であることを否定しようとして、「旦那様の朴園」を“nin”を使って指示する。彼女はすでに、何も知らない

四鳳と周萍を行かせることに同意している。今さら真実を明かすことはできない：

朴：（明白地）怎麼——（向侍萍）侍萍、你到底還是回来了。（事態をさ
とって）どうして・・（侍萍に向かって）侍萍、おまえはやっぱり戻っ
てきたんだな。

繁：（惊）甚麼？（驚いて）なんですか？

侍：（慌）不、不、您弄錯了。（あわてて）いえ、いいえ、おまちがえです。

4-198

彼女の必死の否定にもかかわらず、すべては明らかになる。その結果、四鳳と、彼女を追った冲は、漏電している電線に触れて死に、大海は失踪する。次は、大海を追うように命じたあとの朴園の台詞である：

朴：（哀傷地）我丢了一個兒子、不能再丢第二個了。（嘆いて）息子をひとり失って、ふたりまで失うなんてことはできない。

侍：都去吧！ 讓他去了也好、我知道這孩子。他恨你、我知道他不会回来見你的。みんな行っておしまい！ 行かせればいいのよ。あの子は、あなたを恨んでいます。あなたに会いに戻ってくるはずなんてないわ。

4-203

ここで、侍萍は再び朴園を“ni”で指示している。この直後に、周萍の銃声が聞こえ、劇は終わる。

10年後を描くプロローグとエピローグを見ると、ふたりはずっと、失踪した大海の帰りを待ち続けてきたことがわかる。もし大海が帰ってきたら、新しい物語が始まるのであろうが、エピローグの朴園の台詞では、その可能性は皆無に近いようだ。朴園と侍萍は、劇物語の根源にいる男女のペアであり、すべての事件がふたりをそもその起点にして発生した。エピローグではそのふたりが揃って姿をあらわし、劇をしめくくるのである。

周萍が初めて魯侍萍と会うのは、周家に交渉に来た大海が、朴園の措置に怒って暴れ出し、喧嘩沙汰になったときである。侍萍は思わず周萍の前に駆け寄り、泣きながら大海をかばう。侍萍は、目の前の青年が周萍であることを、すでに朴園から聞かされているが、周萍にとっては、突然見知らぬ女が飛び出してきたのである：

萍：你是誰？（あんたは誰ですか）

侍：我是你的——你打的這個人的媽。（あなたの・・あなたがなぐったこの

子の母ですよ) 2-112

その後、四鳳の母であるとわかると、“魯奶奶”（魯おばさん）と呼びかけ、“nin”を使うようになる。

萍：魯奶奶、請您相信我、我一定好好地待她、我們現在決定就走。

（魯おばさん、ぼくを信用してください、きっと四鳳をだいじにします、ぼくたちいま出発することにしました）。4-188

ところが、周萍はこの後、侍萍が亡くなったはずの生母だと知ることになる。侍萍は彼にとって、見知らぬ女→大海の母→四鳳の母→自分の生母というふう
に、彼との関係を変えていく。周萍にとっては、想像の中で美化された母と
実際の母（侍萍）の姿とはあまりにかけ離れ、しかも恋人の四鳳の母でもあ
るとは、耐え難い現実であった。周萍をとりまく女は、繁漪と四鳳の二人だけ
ではなく、幻想の中の実母もそのひとりである。最後にその実母がもたら
した恐るべき現実に直面した彼は、耐えきれずに自らの生を閉じるのである。

3.2. 周繁漪と周萍

周繁漪は、“ni”と“nin”の使い分けの指示者ではなく、指示対象であり、また、“ta”の用法に関しては際だった特徴が見られる。

周家の長男・萍は、父に対しては常に“nin”で指示するが、母の繁漪には、第三者の面前で“nin”を、ふたりだけの場合は“ni”を、という画然とした使い分けをする。彼が繁漪を“nin”で指示するのは、母として扱うべき公の場面においてであり、“ni”を使い、ファンイ（繁漪）と呼ぶ（2-77）のは、かつての愛人で今は重荷でしかない繁漪と相対するときである。

次は、繁漪と周冲の話しているところへ周萍が入ってきた場面での会話である：

冲：哥哥。にいさん。

萍：你在這兒。おまえ、ここにいたのか。

繁：（覺得沒有理她）萍！（無視されたと思って）ピン！

萍：哦？（低了頭、又抬起）您——您也在這兒。え？（うつむき、再び顔を上げて）あなた・・・あなたもここでしたか 1-56

周萍がきわめて意識的に、繁漪を“母親”と呼ぶ場面がある。父と母を避けて通り過ぎようとした萍を、朴園が呼び止める場面である。萍は、生き直すべく周家を離れようとしている：

朴：你不是明天早車走嗎？ あしたの朝早い汽車で行くんじゃなかったの

か。

萍：我忽然想起今天夜晚兩点半有一趟車、我預備現在就走。今晚二時半に汽車があるのを思い出しましたので、今すぐに行くつもりです。

繁：（忽然）現在？（突然に）今すぐ？

萍：嗯。ええ。

繁：（有意義地）心里就這樣急嗎？（意味ありげに）そんなに急いでいるの？

萍：是、母親。はい、おかあさま。4-165

上の例で“母親”と呼んだそのすぐあとで、朴園が退場し、ふたりだけになると、萍は“ni”に切り替えて繁漪を指示する。次の対話の中で、周萍が「ぼくの母」といって指すのは「亡くなった実母」である。

萍：你——（故意惡很地）你自己要走這一條路、我有甚麼亦法？あなたが——（わざといじわるく）あなたが自分で道をみつけるしかない、ぼくはどうしてあげることもできないよ。

繁：（憤怒地）甚麼、你忘記你自己的母親也被你父親氣死的嗎？（憤然と）なんですって、あなたは自分の母が、父のせいでひどい目にあってるのを忘れたの？

萍：（一了百了、更很毒地激惹她）我母親不象你、她懂得愛！她愛她自己的兒子、她沒有对不起我父親。（すべて承知というふうに、さらに毒づいて）ぼくの母はあなたみたいじゃないよ、ぼくの母は愛情というものがわかっている、子供を愛しているし、父に申し訳の立たないことなんかしないよ。4-169

繁漪は、朴園の妻、萍と沖の母、萍の愛人という3つの立場の中で、沖の母であることを除くと、ほかはすべて破綻同然の状態にある。前妻にこだわり続ける夫の朴園、亡母を美化してやまない周萍、この自己完結したトライアングルから繁漪はひとり疎外されている。それに、夫からは精神病扱いにされ、愛人であった周萍からも今では疎まれている。「朴園は私に沖を生ませてだけ」（2-77）、「父子二代にわたって騙され侮辱された」（2-88）のであり、彼女はまことに孤独で悲惨な生存を続けている。

繁漪は、最後には、周萍との関係をすべてさらけだす。周萍は、そうした彼女を、それまでとは違って、第三者の面前であっても“ni”で指示するようになる。

次の会話は、劇の終盤で、周萍が四鳳を連れて家を出ようとしたとき、繁漪

がその前に立ちふさがり場面である。彼女は、四鳳に想いを寄せている息子の沖にこの事態を見せつけるべく、沖を呼ぶ。現れた弟の沖を見ると、周萍は繫漪に向かって：

萍：（焦燥、向繫漪）你這是干甚麼？（あせって、繫漪に対して）これはどうしようっていうんだ？

繫：（嘲弄地）我叫你弟弟来跟你們送行。（嘲弄して）あなたの弟にお見送りさせますわ。

萍：（気憤）你真卑——（憤慨して）あんたはなんて、卑劣・・・4-193

繫漪はさらに朴園を呼び、その結果、朴園の口からすべてが明らかになる。繫漪は、いあわせた劇中人物みんなの前で、最後の破滅に至る引き金をひく役割を担ってしまったのである。

以上のように、繫漪が指示者ではなく、指示対象として、しかも彼女が執着する周萍による“ni”、“nin”の使いわけの対象となっているのは、あたかも、ひたすら受け身で、自己分裂を強いられた存在であるかのようにだが、一方で彼女は、“ta”の使用においてその使用者として顕著な特徴を見せる。

「雷雨」には、“ta”の文脈指示の用例の中に、先行詞なしにいきなり指示したり、あるいは、先行詞がさがしにくいために、聞き手が指示対象を特定できないものが見られる。このような“ta”の用例が6件見られるが、その使用者で最多なのが繫漪（3件）である。次の例では、先行詞と、“ta”の指示対象とが結びつきにくいいため、わかりにくくなっている。

繫：你父親干甚麼呢？ おとうさん（魯貴）は何をしているの

鳳：大概跟老爺買檀香去啦。——他說、他問太太的病。旦那さまの白檀を買いにまいったのでしょ。父が奥様のおかげんをおたずねするよにとのことでした。

繫：他倒是惦记着我。（停一下忽然）他現在還沒起來麼？ あの人私のことを心配してくれているのね。（ちょっとしてから突然）あの方はまだ起きないの。

鳳：誰？ だれです？

繫：（沒有想到四鳳這樣問、忙收斂一下）嗯、——自然是大少爺。（四鳳にこんなふうにかれるとは思いがけなく、さっと表情をひきしめて）ん——もちろん上の坊ちゃまのことですよ）1-42

問題の“ta”は、引用例よりさらに前の文脈に先行詞“大少爺”があるが、その後、他の人物（魯貴）が話題人物として介在し、しかも、直前の文で“ta”で

指示されているため、それぞれ違った人物を指すふたつの“ta”が近接してしまい、指示対象がわかりにくくなっている。

上の対話での話題は、この後、“大少爺”から四鳳に移り、さらに“老爺”に及び、その後、繁漪は、突如として再び“ta”で“大少爺”を指す。次の引用箇所は、“老爺”を話題にしている部分の途中からである：

鳳：我怕老爺念經喫素、不喜歡我們伺候他、聽說老爺一向是討厭女人家的。旦那さまはお経と精進食でお過ごしで、わたしどものお世話がお嫌いだと思います、旦那様はずっと、女がおきらいでいらっしゃるとお聞きしましたが。

繁：哦、(看四鳳、想着自己的經歷) 嗯、(低語) 難說的很。(忽而抬起頭來、眼睛張開) 這麼說、他在這幾天就走、究竟到甚麼地方去呢？まあ、(四鳳を見て、自分のこれまでを思い) ん、(小さい声で) なんといたらよいかむずかしいわね。(突然、顔をあげて、目を見開き) それにしても、あの人がここ数日いつも出かけていたのは、結局どこへ行っていたの？)

鳳：(胆怯地) 您說的是大少爺？(こわごと) 奥様がおっしゃるのは、上の坊ちゃまのことでしょうか。1-43

このように、一連の対話の中で、指示対象の特定しにくい“ta”を繰り返し使っている。周萍への関心とこだわり、それに、対話の相手の四鳳へのこだわりが重なって、明示的な指示を妨げているのであろう。

次の例では、眼前にいない人物を先行詞なしに、いきなり“ta”で指している。食堂から出てきた繁漪が突然、周萍に言う：

繁：他上哪兒去了？ あの人はどこへいったの。

萍：(莫明其妙) 誰？(わけがわからず) だれです。

繁：你父親。あなたのおとうさまよ。2-75

次は周萍に向かって言う台詞だが、“ta”の先行詞“失望的女人”は話者の繁漪を指していて、一人称が使われるべきところに“ta”が使われている。

繁：(冷笑) 小心、小心！ 你不要把一個失望的女人逼得太很了、她是甚麼事都做得出来的。(冷笑して) あぶない、あぶない！ 失望した女をあまりに追いつめちゃいけないわ。彼女は何だってやっちゃいますからね。2-117

自身を“ta”で指示する例をもうひとつ。萍、侍萍、四鳳の面前で、息子の冲に向かっていう台詞である：

繫：・・・略・・・你的母親早死了、早叫你父親压死了、悶死了。現在我不是你的母親。她是見着周萍又活了的女人、(不顧一切地)她也是要一個男人真愛她、要真真活着的女人！おまえのお母さんは死んじゃったのよ。お父さんにおしつぶされて悶え死んだの。今では私はおまえの母親じゃない。彼女は萍に会って生き返った女、(すべてを顧みずに)彼女は心底愛してくれる男の人が必要だし、生き生きと暮したい女なのよ！ 4-196

次は、上の台詞にすぐに続くもので、萍に向かって言う台詞の後半部分だが、聞き手の萍を“ta”で指示している。上の例の、自身を指す“ta”と対応して使われているものと考えられる：

繫：・・・略・・・你的父親只叫我生了冲了、然而我的心、我這個人還是我的。(指萍)就只有他才要了我整個的人、可是他現在不要我、又不要我了。あなたの父親は私にただ冲を生ませてだけ、でも私の心は、私はやはり私。(萍を指して)彼だけが私をまるごと求めてくれた、でも今では彼は私をいらなくなった、いらなくなったのよ。4-196

二人称で指示すべき対象を、三人称で指している例をさらに一つ挙げる。周萍が、繫漪と周冲の話しに加わらず、部屋に下がろうとする場面である：

冲：不、哥哥、母親說好久不見你。你不願意一齊坐一坐、談談麼？ だめだよ、兄さん、おかあさんが、しばらく兄さんと会ってないって言うてるよ。いっしょにちょっと坐って、話しをしない？

繫：你看、你讓哥哥歇一歇、他願意一個人坐着的。ほら、お兄さんに休ませてあげなさい。お兄さんはひとりでいたいなのよ。

萍：(有些煩)那也不見得、我總怕父親回來、您很忙、所以——(煩わしそうに)そうでもないですよ。お父さんがかえってくるんじゃないかと思って、あなたも忙しいでしょうし、だから——

冲：你不知道母親病了麼？ 兄さんは、母さんが病気だってこと知らないの？

繫：你哥哥怎麼會把我的病放在心上？ おまえのお兄さんが、私の病気を気かけたりするもんですか。1-56

上の例で、周萍は繫漪を“nin”で指示しているのに対し、繫漪は周冲を聞き手にして、“ni 哥哥”、“他”を使い、周萍が第三者であるかのように指している。

以上のように、対象が不明示であったり、直接指示を回避するような“ta”の使用からは、繫漪の他者とのコミュニケーションのありかたの特徴がうかがえ

るし、他者に向かってあらわに棘を出しがちな彼女の性格の一側面が表れていると言えよう。

曹禺は、繁漪について、極端、矛盾といった特徴を備えた最も「雷雨的な」人物形象であると述べている（「雷雨」序）が、その特性は、上の諸例に見られる繁漪に通じるものである。

プロローグとエピローグでは、老いた朴園が入院している繁漪と侍萍を見舞いにくる。プロローグで、朴園はうっかり侍萍の病室のほうへ歩いていってしまい、教会病院の尼僧に、「奥様の病室は二階ですよ。」とたしなめられる場面がある。エピローグでは、大海を待ちわびて病室から出てきた侍萍に、朴園が呼びかける場面がある。ところが、ひとり繁漪のみは、大声で暴れ回る、手のつけられない病人であるためか、舞台には一切姿を見せない。朴園の侍萍に対する関心に引き比べ、繁漪はここでもなお十分に顧みられずにいると見てとれるのである。

3.3 魯四鳳と魯貴、周萍、周冲

魯四鳳の発話には、心理的な要因による使い分け、役割・立場の違いによる使い分けの典型例が見られる。

四鳳の父・魯貴は、貪欲で抜け目めのない下僕であるが、同じ周家に女中として働く娘の四鳳が周萍と秘密の恋仲であることを知っていて、それをほのめかしては小遣いをせびり取り、酒、賭博に使っている。

四鳳はそうした父を基本的には“nin”で指示するが、“ni”も使う（12件見られ、そのうち10件が主語の位置にある）。また、わずかであるが、“nin”よりさらに敬語性の高い“nin 老人家”も使う（2件）。次の例では、一連の会話の中で、“nin 老人家”→“nin”→“ni”と指示のしかたが変化する。

貴：（着急）鳳兒、你這孩子是甚 me 心事？你可是我的親生孩子。

（あせって）フォン、なんて心がけだ？お前は俺の実の娘だぞ。

鳳：（嘲笑地）親生的女兒也沒有法子把自己卖了、替您老人家還賭賬啊？

（あざ笑って）実の娘がしかたなく身を売っているのに、おとうさんに代わって賭博の借金を返済しろってわけですか？

貴：（嚴重地）孩子、你可放明白点、你媽疼你、只在嘴上、我可是把你的甚麼要緊的事情、都处处替你想。（いかめしく）フォンよ、わかってくれ、母さんがお前を可愛がるのは口先だけのことさ、だが、この俺はお前の大切なことは、どんなことだって親身になってやってるんだぞ。

鳳：（明白地、但是不知他鬧的甚麼把戲）您心里又要說甚麼？（わかったようすで、しかし、父が何をたくらんでいるかはわからず）まだ何か言いたいんですか。

貴：（停一停、四面望了一望、更近地逼着四鳳、佯笑）我說、大少爺常跟我提過你、大少爺、他說——（話をやめ、あたりを見まわしてから、四鳳にいつそう近づいて、作り笑い）あのな、上の坊ちゃまがいつも俺に向かってお前のことを話題になさってな、坊ちゃまが言うには—

鳳：（管不住自己）大少爺、大少爺、你瘋了！（おさえきれずに）上の坊ちゃま、上の坊ちゃまって、おとうさん、おかしくなったんじゃないの！ 1-24

四鳳は父を嫌い、耐え難く思っているが、全く父を相手にしない兄の大海とは違って、「どうであろうとやはり自分の父親である」（1-28）という認識で父を受け入れているため、なだめすかしたり、時には強硬な態度に出たり、様々なストラテジーを駆使して父に対応している。¹⁰上の例の後では、再び“nin”に戻るのだが、父との間のそのときどきの心理的距離の変化に応じて、人称指示のしかたも調節されるのである。

四鳳と魯貴の対話には、たとえば次例のように、周萍を“ta”で暗に指す用法がいくつか見られる。

貴：（笑、掩飾自己）你看、你看、你又那樣。急、急、急甚麼？我不跟你要錢。喂、我說、我說的是——（低声）他——不是也不斷地塞給你錢花麼？（笑って、本心をおかくして）ほれ、ほれ、またそんなふうにする。なに、なにを、なにを怒ってるんだ？俺はお前から金をもらおうとしてるんじゃない。おい、俺が言ってるのはだな——（小声で）あの人は——お前に欠かさずお金をくださるんじゃないのか？

鳳：（驚訝地）他？誰呀？（おどろいて）あの人？誰のこと？

貴：（索性説出来）大少爺。（思い切って言う）上の坊ちゃまだよ。

鳳：（紅臉、声略高、走到魯貴面前）誰説大少爺給我錢？爸爸、您別又窮瘋了、胡説乱道的。（顔を赤くして声はうわずり、魯貴の前に来て）上の坊ちゃまが私にお金を下さるなんて、誰がいったのよ。おとうさん、お金に困っているからって、めちゃくちゃなこと言わないでよ。1-

19

魯貴は上の発話の中で、“大少爺”（周萍）を先行詞なしに“ta”で指示している。“大少爺”と四鳳との特別な関係をほのめかすために、故意にあいまいに指

し示しているのである。

次の例では、魯貴が、男女の“鬼”（幽霊）が出た話をしているが、“ta”の用法に注目したい。

鳳：鬼麼？甚麼様？（停一下、魯貴四面望一望）誰？ ゆうれい？どんなふうな？（しばらく魯貴の周囲を見回して）だれだったの？

貴：我這才看見那個女鬼呀、（回頭低声）——是我們的太太。俺はたしかに女の幽霊を見たんだ（振り返って、小声で）——奥様だよ。

鳳：太太？——那個男的呢？ おくさま？——男のほうは？

貴：那個男鬼、你別怕、——就是大少爺。男の幽霊はな、驚くなよ、——上の坊ちゃまだった。

鳳：他？ あの人？

貴：就是他、他同他的後娘就在這屋子里鬧鬼呢。あの人だよ。あの方は義理の母親といっしょの部屋で幽霊になって出たのさ。1-34

「男女の幽霊」は繁漪と周萍の秘密の関係を暗に示している。四鳳は、“女鬼”が“太太”だと聞かされると、“太太”という語を反復して確認しているが、“男鬼”が“大少爺”だと聞かされたときは、“大少爺”という語を繰り返さずに、“ta”を使って応じている、というアンバランスが見られる。この“ta”は、直前に先行詞“大少爺”があるので、文脈指示の通常の用法のようにも見えるが、むしろ、無防備な四鳳が思わず、“ta”と指示したことによって、“大少爺”との特別な関係を自ら露呈してしまったものと理解できよう。

周家の下女としての四鳳は、“太太”（奥様）の繁漪には“nin”を使うが（“老爺”（旦那様）の朴園とは会話もわずかなため、指示する場面は見られない）、子息の周萍と周冲に対しては、“ni”を常用している。これは、徹底して下僕らしい振る舞いの見られる父の魯貴が周萍、周冲のどちらにも、常に“nin”を使うのと、対照的である。

四鳳は、周萍とは人目を忍ぶ恋仲であり、ふたりは、主人と下女、恋仲という二重の関係にある。関係の二重性は、第三者の前では周萍を“大少爺”と呼び、ふたりだけのときは“ピン（萍）”と呼ぶという呼び分けをもたらしめている。しかし、二人称代名詞の使用では、わずかな例を除いてほとんど“ni”が使われている。というのも、四鳳と周萍の会話場面は、恋愛関係にあるふたりだけの場面がほとんどなため、“ni”の使用が際だっているのである。

第三者の面前での会話で、“nin”が使われている例がひとつだけある。周家の

屋敷に着いた母の侍萍を出迎えに行くとき、「お母さんによろしくね」（“四鳳、見着你媽、跟我問問好。”）と周萍に言われて、「ありがとうございます、また、あとで」（“謝謝您、回頭見。”）（2-74）と答える簡単な応答のときである。母の到着を知らせに来た魯貴が面前にいることが、“nin”を選択させていると考えられる。この例から見ても、四鳳は“ni”と“nin”を使い分けていると推察できるが、“ni”がほとんど常用されている状況が、彼女の立場を特徴づけている！

四鳳が周家から解雇され、周萍が明日炭坑へ行ってしまうというその前の晩、周萍はむりやりに四鳳に会いに魯家を訪ねる。彼を拒んで家に入れまいとする四鳳ともみあう場面がある。ふたりだけの場面である。執拗に帰ろうとしない周萍に向かって、四鳳は、ふだん“ピン（萍）”と名前を呼んでいるのに反して、“大少爺”とよびかけ、ふたりの立場の違いを気づかせようとする。

鳳：（苦痛地）阿、大少爺、這兒不是你的公館、你餓了我吧。（苦しげに）あ、坊ちゃま、ここはお屋敷じゃありません、許してくださいな。3-152

鳳：（哀訴地）哦、大少爺、你別再纏我好不好？（哀願して）ああ、坊ちゃま、もう私にまとわりつかないでください。3-153

この二ヶ所でのみ四鳳は“大少爺”とよびかけるが、それでもなお、“nin”は使わずに、“ni”で通している。

四鳳が、第三者の面前で周萍を指示する場面がもうひとつだけある。終盤近く、兄の大海の理解を得て、ふたりですぐに家を出て、再出発しようとする。母の侍萍は、四鳳と周萍が同母兄妹であることを知っていながら言い出せないまま、ひたすらふたりに抵抗して行かせまいとする。そのとき、四鳳は胸の中におさめていた事実を告げる。

鳳：萍、我總是瞞着你；也不肯告訴您（乞怜地望着魯媽）媽、您——ピン、わたし、ずっとあなたをだましていたし、おかあさんにも言えなかったけど（すがるように母を見る）おかあさんは・・・4-190

四鳳の発話の中の“ni”は周萍を指し、“nin”は母の侍萍を指している。上の場面では、面前の侍萍と大海には、四鳳と周萍との関係がすでに明かされているので、“ni”を使っているのである。

四鳳は、周萍の弟・周冲を“二少爺”と呼ぶが、同時に“ni”を使う。もっとも、場面に制約があり、第一幕での繁漪、周冲、四鳳の三人の会話では“二少爺”をもっぱら使って人称代名詞を使っていないのは、繁漪が同席しているた

めであろう。しかし、たとえば魯家の成員の面前では、人称代名詞を使い、“ni”を常用する。これは、周冲が平等主義者で、しかも四鳳にプロポーズまでしていることや、四鳳より年下（1歳違い）ということなどが“ni”の選択の要因となっているのであろう。

四鳳が解雇された晩、周冲は母に言われて魯家を訪ねる。在宅していて迎えたのは魯貴と四鳳だが、次例に見られるように、周冲に対して魯貴は“nin”を、四鳳は“ni”を使っている：

貴：二少爺、您先坐下。四鳳、(指円卓)你把那張好椅子拿過來。坊ちゃま、お掛けください。スーフォン、(円卓を指して)そのいい椅子をこっちへ。

冲：(見四鳳不説話)四鳳、怎麼、你不舒服嗎？(四鳳が黙っているのを見て)スーフォン、どうしたの、気分でも悪いの？

鳳：没有。——(規規矩矩地)二少爺、你到這里來干甚麼？要是太太知道了、你——いいえ、——(行儀正しく)坊ちゃま、なぜここへいらっしゃいましたの。もし、奥様のお耳に入ったら、坊ちゃまは—— 3-134

周冲は、解雇された四鳳を励ますうちに気持ちが高じて、日頃の考えを披露するが、四鳳にとってはむしろ迷惑な発言である。ここで四鳳は、周冲に向かって“nin”を2度使う。これが唯一“nin”が使われる箇所である。

冲：不、你不是個平常的女人、你有力量、你能喫苦、……中略……我討厭我的父親、我們都是被压迫的人、我們是一樣。——いや、君はふつうの女の人とは違うよ、能力があるし、苦勞にもめげないし、……略……ぼくは、父がきらいだ、君もぼくも虐げられている、ぼくたちは同じだよ。

鳳：二少爺、您渴了吧、我跟您倒一杯茶。(站起倒茶)坊ちゃま、のどがかわいたでしょう。お茶をお入れしましょう。(立ち上がってお茶を入れる)

冲：不、不要。いや、けっこうだよ。

鳳：不、讓我再伺候伺候您。いえ、もう一度お仕えさせてくださいね 3-137

四鳳は日頃から、周冲の一方的な愛情を疎ましく感じている。上の例では、“nin”を使うことによって周冲の過剰な思い入れをかわし、主人と使用人の身分関係と呼び起こさせようとしている。

四鳳は、周家の兄弟のどちらからも愛され、大切にされている。彼女はただの下女とは明らかに違った存在で、一方では周家での快適な立場を享受しながら、同時に、本分をわきまえることを信条とする母の侍萍に知られるのを恐れている。そうした矛盾をよく承知しているのが、父の魯貴と兄の大海である。魯貴は彼女の心理を承知の上で、執拗に周萍を話題にしたがるし、大海は四鳳を評して「周家での華やかな暮らしに惑わされ、貧しい自分の家に今ではなじめなくなっている」(3-140)と言う。周萍を“ni”で指示する場面設定が大多数であることから、そうした四鳳の置かれた立場がよく伝わってくる。

一方で、周萍をめぐる四鳳と三角関係にある繁漪が、“ni”と“nin”の使い分けの対象になっているのと比べても、ふたりの女性の立場の対照性は歴然としている。

おわりに

小論は、二人称代名詞の選択使用、および三人称代名詞のいくつかの用法を中心に取り上げ、個別に語用論的な分析を加えながら、これらの人称指示標識がテキストの流れの中でいかに指標として機能しているかを、劇内容との関連の上で分析してみた。もとより、人称代名詞の分析だけからは、限られた結果しか得られないが、複雑な人物関係が、人称指示の用法に反映しているようなケースについては、ある程度の特徴を導き出すことができたと思う。

パラメータを人称指示のみに設定した今回の試みを、複数の言語標識を抽出し、多面的・立体的な分析を試みるための最初のステップとしたい。

<注>

- 1) 「雷雨」の初版は1934年「文学季刊」一卷三期に載ったもので、1936年文化生活出版社から単行本として刊行された。作者は、新中国成立後に、序幕と尾声(エピローグ)の削除を含めて相当部分の書き直しをしているが、「曹禺文集」は生活文化出版社版に拠るものであり、序幕と尾声を備えていることを含め、書き直し以前の面目を保っている。
- 2) 小論では、“你”を“ni”、“您”を“nin”とピンインで表記する。以下同様。
- 3) ただし、子→母のふたつの例、四鳳→侍萍および周冲→繁漪は、“ni”がそれぞれ2件見られる。
- 4) ただし、四鳳→周冲は、“nin”が2件見られる。どちらも同一場面で、発話効果をねらった用法である。詳しくは、3-3節参照。

5) 小論では、“他”および“她”を代表して“ta”とピンインで表記する。ただし、必要な場合は漢字表記とし、両者を書き分ける。

6) 引用例の中で問題とする標識については、人称代名詞に、~~~~~を、先行詞や呼びかけ語などの固有名詞、普通名詞に====を付した。また、台詞の後の数字は、幕番号、ページを表す(たとえば、1-11は第一幕、11ページ)。なお、日本語では通常、人称代名詞の使用が回避されることが多いため、原文の人称代名詞は必ずしもそのまま訳出せず、たとえば普通名詞の使用、文体の差などの方法によって対応した。引用例文の漢字は、印刷の都合で日本語で通用する漢字に書き換えてある。

7) 白井(1994)8頁。なお、ト書きの充実が「雷雨」の特徴のひとつであり、読む戯曲としての叙述性・文学性が備わっているとの指摘がある。

8) 繁漪以外の例を、指示者→指示対象(聞き手)で表すと、魯貴→周萍(四鳳)、大海→朴園(魯貴と四鳳)、周冲→四鳳の謎の恋人(四鳳)がそれぞれ1件である。

9) 牧(1990)は「雷雨」をキリスト教的悲劇として位置づけ、エピローグとプロローグは、朴園の贖罪が描かれている点で積極的な意味をもつと分析している。

10) 吉村(1964)には、四鳳が魯貴に向かって投げつける辛辣な言葉の挙例がある。165頁

11) 同じく曹禺の戯曲「家」(巴金の同名小説の戯曲化 1942年作)では、1925年以前という時代設定だが、若主人覚慧と女中の鳴鳳との悲恋が重要なモチーフとなって描かれている。巴金の原作では、鳴鳳は覚慧を“ni”で指示するが、曹禺の戯曲では“nin”で指す。覚慧が次のように言う場面があり、“nin”の選択使用が意識的にされていることがわかる。“鳴鳳、我跟你說過多少次。你為甚麼還是“您”哪、“您”的称呼我呢?”(ミンフォン、君に何度も言っただろう。どうして君は僕のことをいつまでも「あなた様、あなた様」って呼ぶんだい?) (曹禺戯劇集「家」四川文芸出版社、1985 122頁)。

<参考文献>

- 1) 陳松岑 1986 北京話“你”“您”使用規律初探、「語文研究」第3期, 24-31
- 2) 董将星 1986 中国語の対称詞をめぐって、「言語生活」416, 44-50
- 3) 井波律子 1977 「雷雨」論—その原像を求めて—、「金沢大学教養部論集(人

- 文科学篇)」15、39-55
- 4) 木村英樹 1987 中国語の敬語、「言語」Vol.16 No.8, 38-43
 - 5) —————1990 漢語第三人称代詞敬語制約現象的考察、「中国語文」第5期, 344-354
 - 6) 興水優 1977 中国語における敬語「岩波講座・日本語4・敬語」岩波書店
 - 7) 牧陽一 1990 キリスト教的悲劇としての曹禺の「雷雨」「日出」「原野」について、「日本中国学会報」42, 242-257
 - 8) 白井啓介 1994「雷雨」の舞台指示—曹禺戯曲研究への一つの模索—、「中国文化」52、漢文学会, 1-12
 - 9) 王力 1943-1944 「中国現代語法 下巻」
 - 10) 吉村尚子 1964 中国における女性会話の特徴的性格—曹禺の「雷雨」「日出」「北京人」について、「中京大学論叢(教養篇)」5, 147-170
 - 11) 張煉強 1982 人称代詞的変換、「中国語文」第3期, 182-185